ZAWAMEKI ART EXHIBITION 2025

Curate the curation

表現とキュレーションを再構築する

Curate
the curation

ZAWAMEKI ART EXHIBITION 2025

表現と
キュレーションを
再構築する

ザワメキアート展 2025

誰から教わったわけでもなく独自の創作を行っている。作品に強いこだわりが感じられる。よくわからないが、なんだかすごい。ユニークで笑ってしまうような不思議な魅力がある。…長野県では、そんな基準で選ばれた作品を2016年から紹介してきました。2022年以降は、これまでの「ザワメキアート展」のレガシーを継承しつつも、新たな試みとして、毎年様々な分野でご活躍のゲストキュレーターをお迎えし、それぞれの視点からザワメキアートの魅力を紹介しています。

今回の「ザワメキアート展2025」は、ゲストキュレーターに小海町高原美術館学芸員の中嶋実さん、鈴木一史さんのお二人をお招きし、県内で生まれ続けている「ザワメキアート」をどのように紹介するか相談していく中で、テーマを「キュレーションをキュレイトする」として準備を進めていただきました。

ザワメキアート展の開催目的は、障がいのある人の活躍の場を広げるとともに、多様な人々との交流促進、さらには専門家等との連携があげられます。今回のお二人にキュレーションをお願いしたからこそ、アートを媒体とした「新たな気付き」や「ネットワーク」が生まれるのではないかとワクワクしています。

ザワメキサポートセンターは、これからも「ザワメキアート展」をはじめとした作品展の開催のほか、芸術文化活動に関する様々な相談支援、研修等を通じて、障がいのある人の自立と社会参加の推進を図ります。引き続きご支援ご協力をよろしくお願いします。

ザワメキサポートセンター

Curate the curation

表現とキュレーションを再構築する

キュレーションという言葉をご存じでしょうか。展覧会の企画から、展示する作品の選定や展示構成、作家や作品の解説などの専門的な活動を指し、実行するひとをキュレーターといいます。

本展キュレーターである小海町高原美術館の学芸員はザワメキサポートセンターの協力をいただき共に長野県内を巡り「ザワメく」作品を選ばせていただきました。学芸員として多くの作品を見て調査してきた経験を基に、今までのザワメキアート展で出品されていない作品を中心に本展で皆さまに見ていただきたい作品が長野県全域から集まりました。構成と方法を考え展覧会にまとめていくところですが、ここからが普通の展覧会と少し違います。集まった作品は実に多様で豊かな表現をたたえていました。この表現をあのひとに見せたらどう感じるだろう。あのひとならきっと我々が思ってもみないことに気付いてくれるのでは。おもしろい化学反応がおきるといいなあ。そんなことを考えたのです。キュレーションをキュレイトするとはなんだかわかりにくいレトリックのようですが、我々が障がいがある方の表現にもっとも近付いてくれそうなキュレーターを選定（キュレイト）し、表現とキュレーションの再構築を試みることが本展のテーマです。

キュレーターは小海町や山ノ内町の中学生から、アフリカの子ども、教師、作家、デザイナー、セラピスト、詩人、司書、地域おこし協力隊と多岐にわたります。多くの「キュレーター」の視点により、障がいがある方の表現がさらに開かれ、キュレーターの皆さまにとっては、表現に向き合う新たな経験となり、その相互の関係性が鑑賞者と作品を豊かに結びつける展覧会になることを願います。

小海町高原美術館
学芸員　中嶋 実

Contents

02 ごあいさつ

05 Contents

06 Curate the curation

08 AiKA

12 上谷 恋

16 上條 翼

20 河北 泰博

24 北原 裕之

28 髙地 爽汰

32 佐藤 貞夫

36 下山 健

40 中村 豪

44 Miss Erie

48 守屋 慶彦

52 柳澤 誠

56 Y.K Green

60 ミニ・キュレーターズ

66 あとがき

Curate
the curation

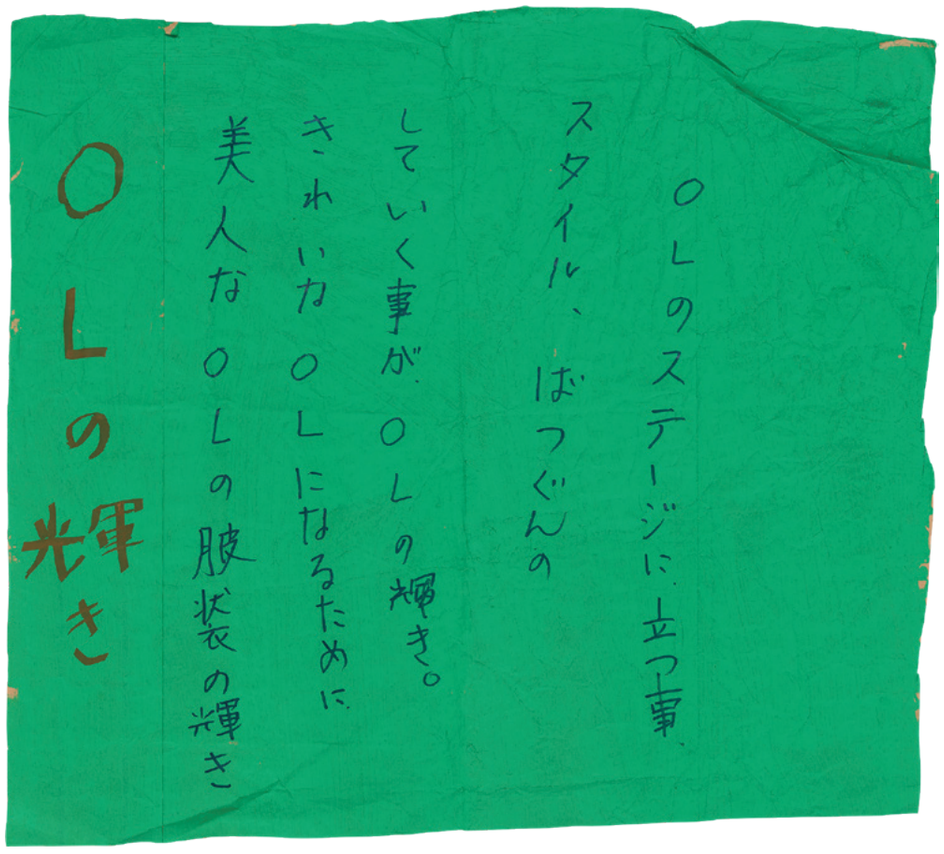
13 artists and 13 curators

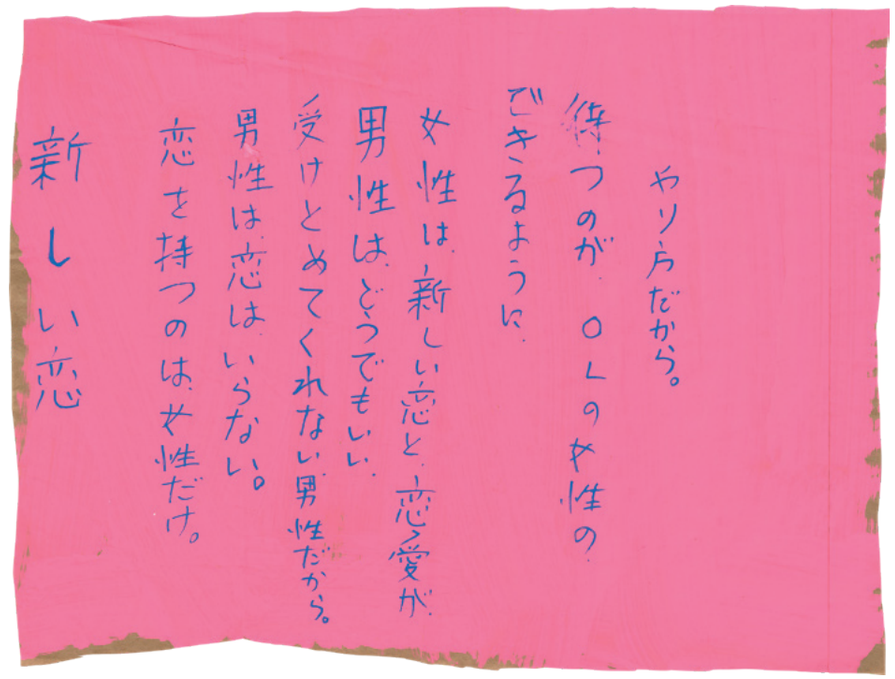
表現とキュレーションを再構築する

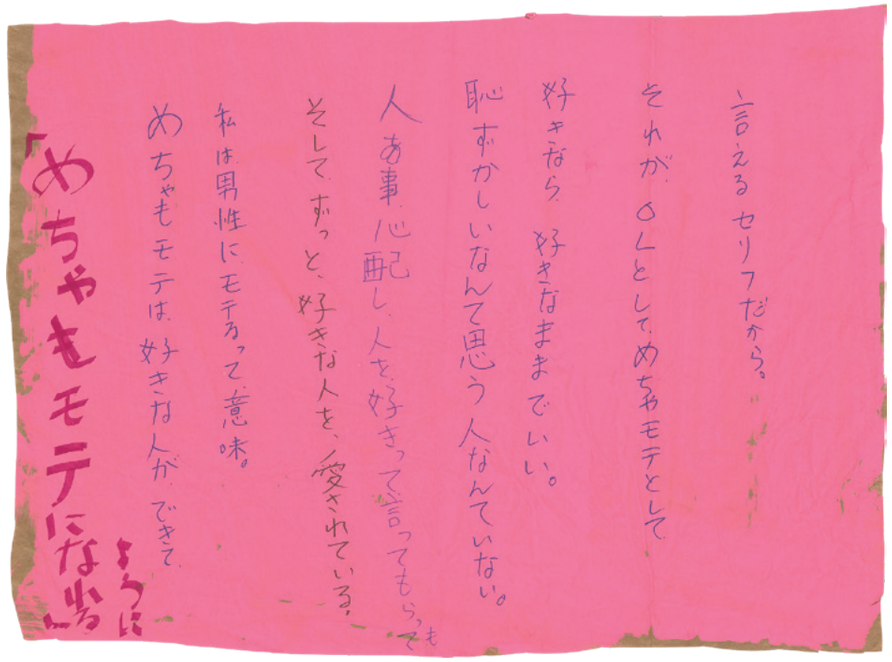
Artists	Curators
AiKA	石田 諒 詩人
上谷 恋	阿部 澄夫 一本木公園バラの会事務局長 / デザイナー
上條 翼	トミ ツカダ（塚田 富芳）グラフィックデザイナー
河北 泰博	細野 夏未 司書
北原 裕之	圓山 佐登子 小海町地域おこし協力隊 多文化共生推進担当
髙地 爽汰	リサ・ソロモン アーティスト /「生生流転 In Flux」出展作家
佐藤 貞夫	中島 由加 セラピスト
下山 健	たかはし びわ 画家
中村 豪	赤羽 雄太 小海中学校教諭（美術科）/ 彫刻作家
Miss Erie	ペギー・テベヤディラ ボネワマン小学校校長 & 菅井 嘉代 JICA 海外協力隊
守屋 慶彦	竹内 延彦 山ノ内町教育長 / 志賀高原ロマン美術館館長
柳澤 誠	新井 彩香 山ノ内町地域おこし協力隊 / 一般財団法人 山ノ内まちづくり観光局
Y.K Green	細萱 航平 アーティスト /「シンビズム 6」出展作家

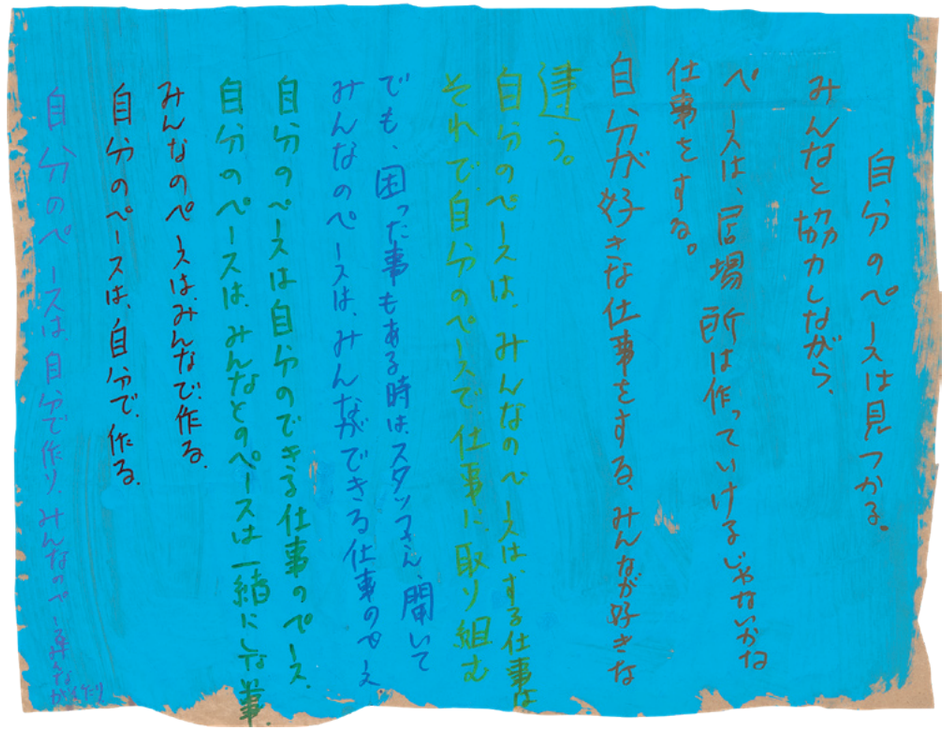
01 AiKA

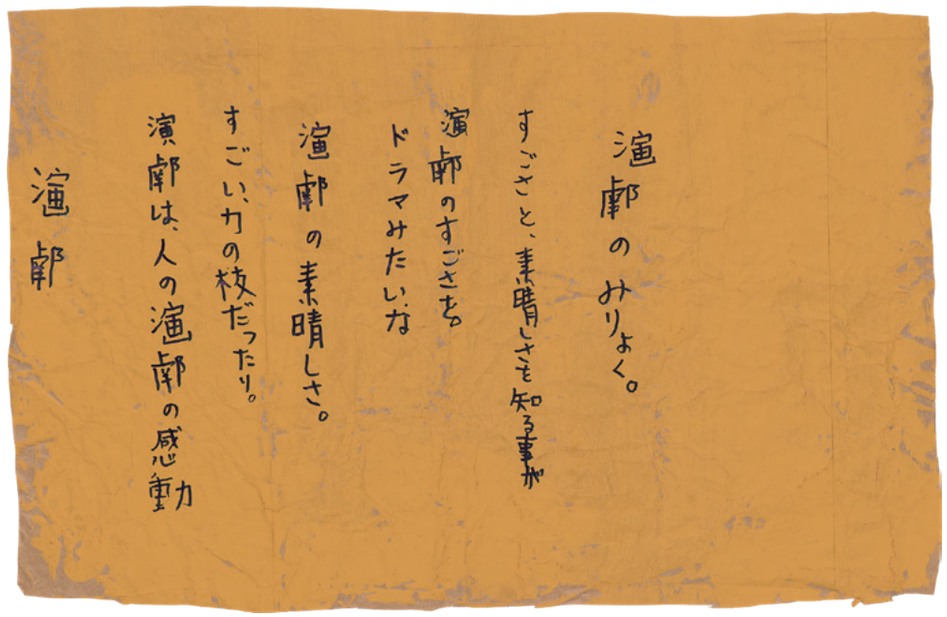
13


OLの光輝き
OLのステージに立つ事、
スタイル、ばっぐんの
していく事が。
きれいなOLの輝き。
美人なOLになるために
OLの服装の輝き


やり方だから。
持つのが、OLの女性の
できるように、
女性は、新しい恋と、恋愛が、
男性は、どうでもいい、
受けとめてくれない男性だから。
男性は、恋は、いらない。
恋を持つのは、女性だけ。
新しい恋


一言えるセリフだから。
それが、OLとして、めちゃモテとして
好きなら、好きなままでいい。
恥ずかしいなんて思う人なんていない。
人を事、心配し、人を、好きって言ってもらって
そして、ずっと、好きな人を、愛されている、
私は男性にモテるって、意味。
めちゃモテは、好きな人が、できて
「めちゃモテになる」





Artist

AiKA

1990 年生まれ｜上田市在住



出展作品は通所初めてアトリエで出会うスタッフやメンバーのこと、AiKA さんの生活の中の出来事から作詩をしたものです。アトリエにある米袋を解体した紙にイベントカラーの下地、ポスターカラーのペンで描いています。アトリエでは詩集も仕事に、同じくポエムも書きます。家では「レコーダー」と「プレイヤー」を駆使して（オリジナルスタイルとのこと）自身で書いた詩を朗読して多重録音していた時期も。最近はタブレットで自身が手書きで書いた詩を撮影して朗読のときに見て読みます。（武捨 和貴 / NPO 法人リベルテ）

言葉はおもしろい。いつでもどこでも使っているものなのに、出会いかたひとつでクスッとしたりドキッとしたりできる。言葉をつかいこなす表現者のことを、詩人、と呼んだりする。AiKA さんもまさに、そのひとりだ。AiKA さんの詩はカラフルな紙に直筆で書かれている。聞けば、この紙はもともとお米が入っていた袋。加工して色紙へとつくり変えてくれる仲間が身近にいるのだという。AiKA さんはその色紙を選んできては言葉を書きつづる。生地を見きわめて衣服を仕立てているようで素敵だと思った。僕も詩を書くけれど、白い紙に黒いフォントで印刷してばかりだ。手書き文字から得られる息づかいは、やっぱり良い。左から右へと書かれた詩の形式は、AiKA さん独自の歩み。それに気づいたとき、パズルが解けたかのような爽快感があって僕はうれしかった。詩に登場する「ＯＬ」という言葉、いまの時代にはあまり耳にしない響きだ。でもなぜだろう、イメージできるものが確かにある。「スタイルばつぐんの恋するＯＬ」と言われたら、仕事もプライペートも充実したキラキラ輝く大人の姿が思い浮かぶ。憧れや目標を持って生きている人は、とても前向きで気持ちがいい。AiKA さんは詩を通じて、ひとりひとりが毎日をハッピーに過ごすためのヒントを教えてくれる。「身近な人を愛して、応援して、言葉にしていこう。もちろん自分のことも大切に、無理しちゃダメだからね。」と受け取った。

Curator

石田 諒

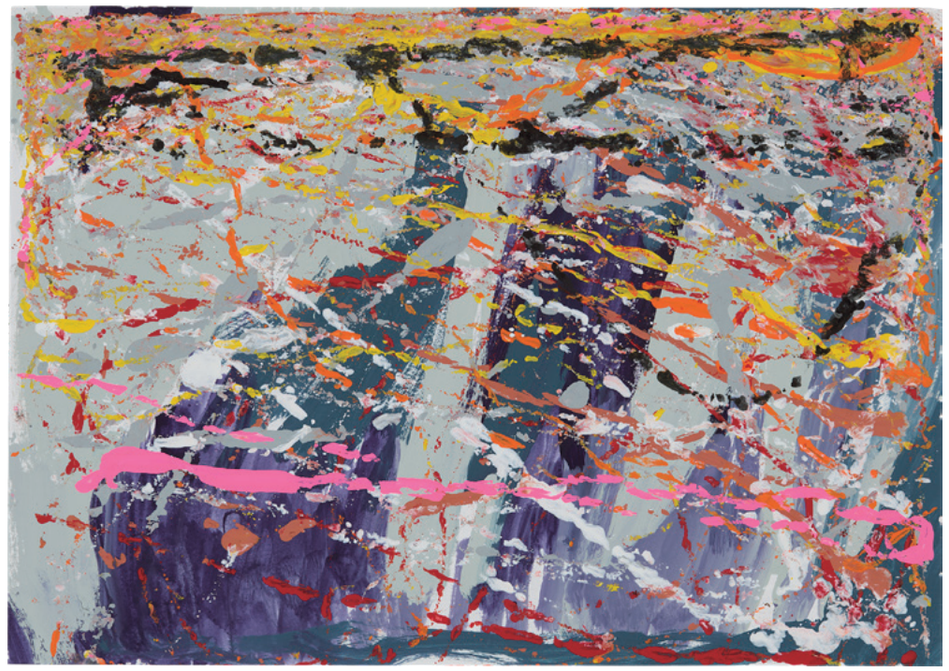
詩人

1986 年東京都生まれ。長野県佐久市在住。詩人。
高校時代に言葉をつかった創作活動をはじめる。
写真や映像を用いた作品制作も行う。詩集に『家の顕末』（思潮社）など。

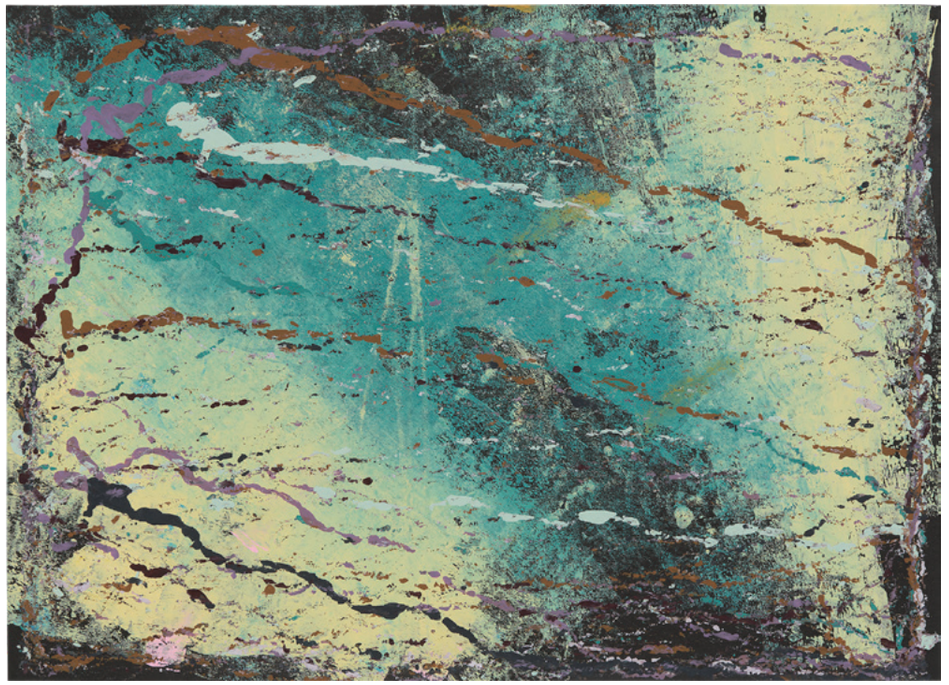


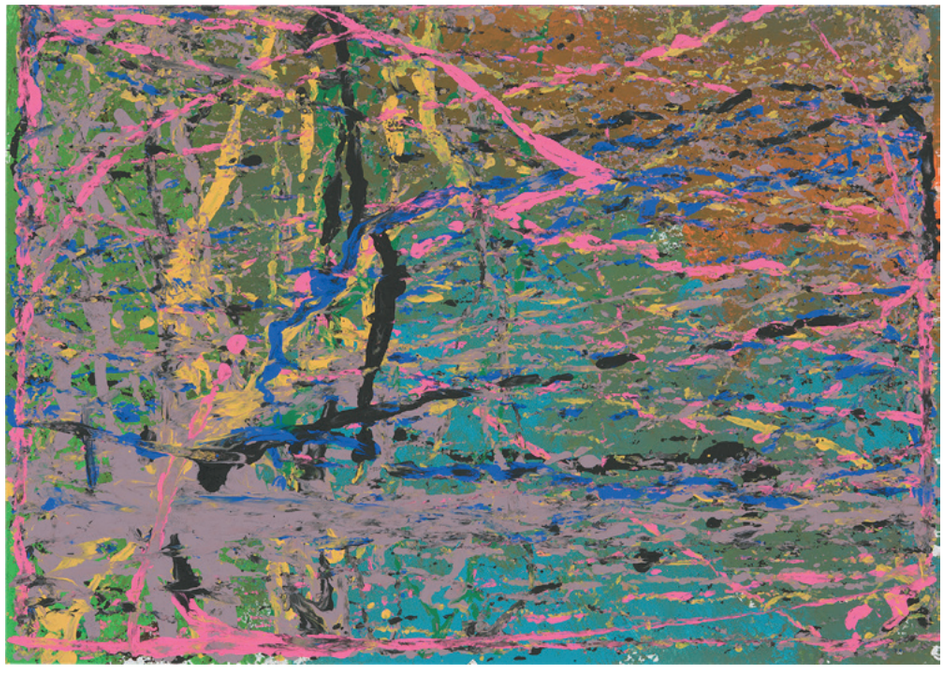
02 上谷 恋

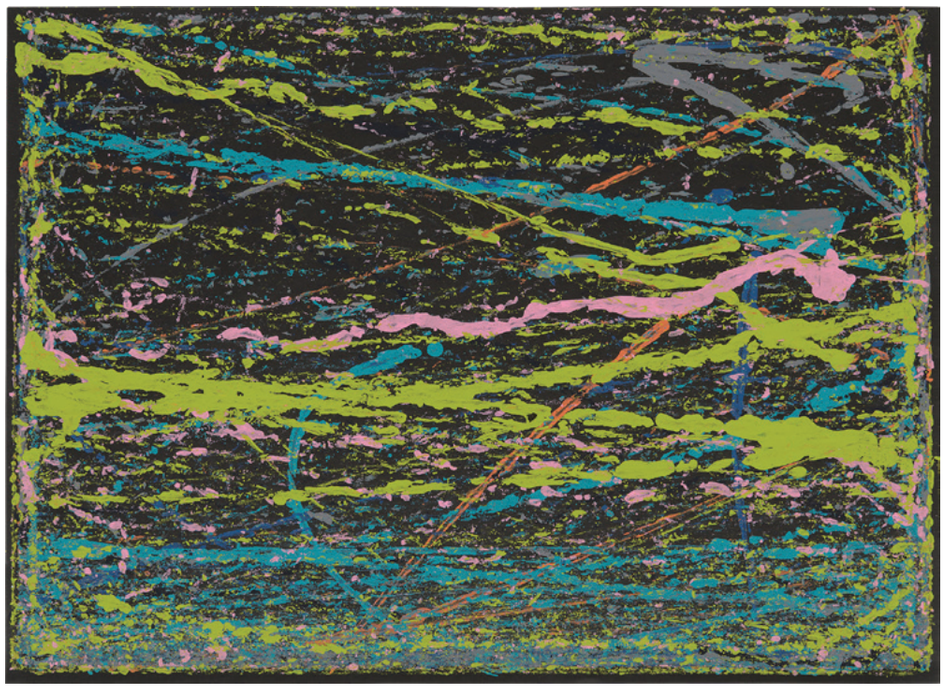
13











Artist

上谷 恋

うえたに れん

1998 年生まれ｜駒ヶ根市在住



塗り絵が好きで取り組んでいた恋さんでしたが、美術活動で絵具を使って積極的に制作するようになりました。最近取り組んでいるのは彩色した画用紙の上に絵具のついたビー玉や木の実などをコロコロと転がしながら何度も痕跡をつける技法です。
ビー玉や木の実に絵具をつけるのは支援員で、恋さんがそれを落とす場所を決め、画用紙が入った箱を揺らしながら制作は進みます。お互いの共同作業の中で出来上がった作品です。
（小川 泰生 / 社会福祉法人長野県社会福祉事業団長野県西駒郷）

「バラ公園」として人気の一本木公園ですが、園内に潜在する一本木公園展示館と中野小学校旧校舎・信州中野銅石版画ミュージアムの 2 施設がより認知され、地域の文化芸術の振興に役立つことを日々願っています。それゆえバラのない季節に、ザワメキアートの会場とし て、このふたつの館を活用いただくご縁に心から感謝申し上げます。今回の展覧会では、箱の中に絵の具を付けたボールを転がし偶然性の模様を出したという作品に出逢いました。この偶然世界は見る人によって違う景色になるのは当然ですが、私にはもう一つの偶然を感じずにはいられません。というのもこの抽象に一本木公園そのものを見つけてしまったからです。（※p.12 作品参照）ピンク、イエロー、オレンジに咲き集うバラ、香り、風雪に揺れる木々の謡い。公園の四季の生命観が浮き立ち、さらに時の流れの狭間に会場となる 2 館が現れる幻想に駆られます。一本木公園展示館は昭和時代に建設されたホワイトキューブ。中野小学校旧校舎・信州中野銅石版画ミュージアムは、明治中期の旧校舎を移築整備した木造洋館。２つの館が時を超え、バラとともに息づくのは一本木公園の誕生が織りなす不思議な縁です。そしてそれは令和のザワメキアートとの出逢いに通じる素敵な偶然となりました。滑走する箱を増やすも繋ぐも広げるも創造主の思いのまま。美を探求するエネルギーは無限で、その度に素敵な偶然が訪れ、奇跡をも生むかもしれません。

Curator

阿部 澄夫

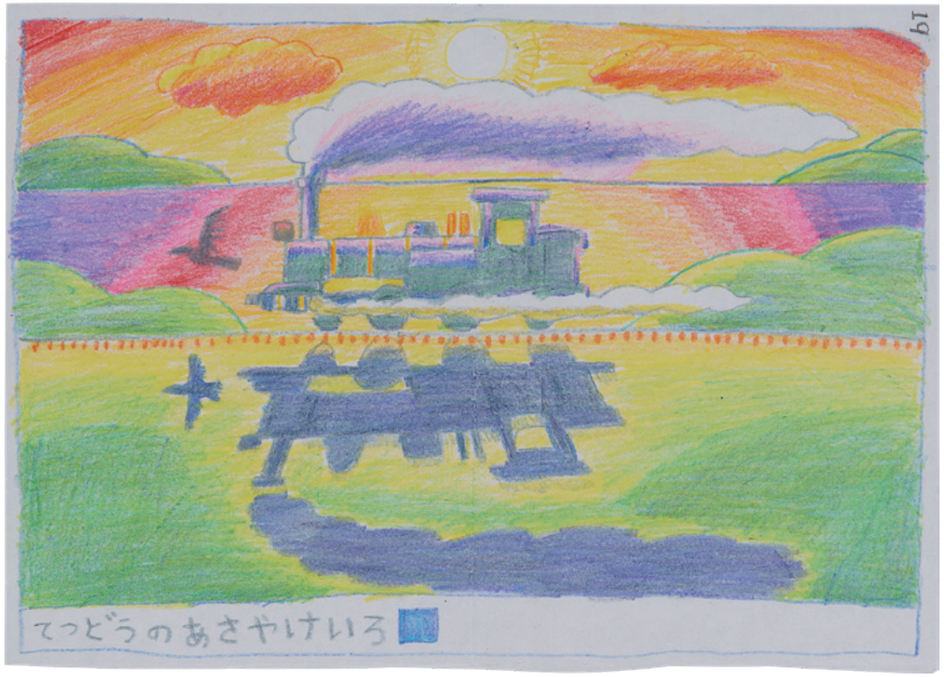
一本木公園バラの会事務局長 / デザイナー

地域新聞社に 20 年間勤務の後、2015 年デザインハウス プランクリエを開設。翌年から一本木公園の事務局長を務める。近年はバラと芸術を結ぶ活動に従事し、美術・映像・音楽を融合した作品づくりを展開している。

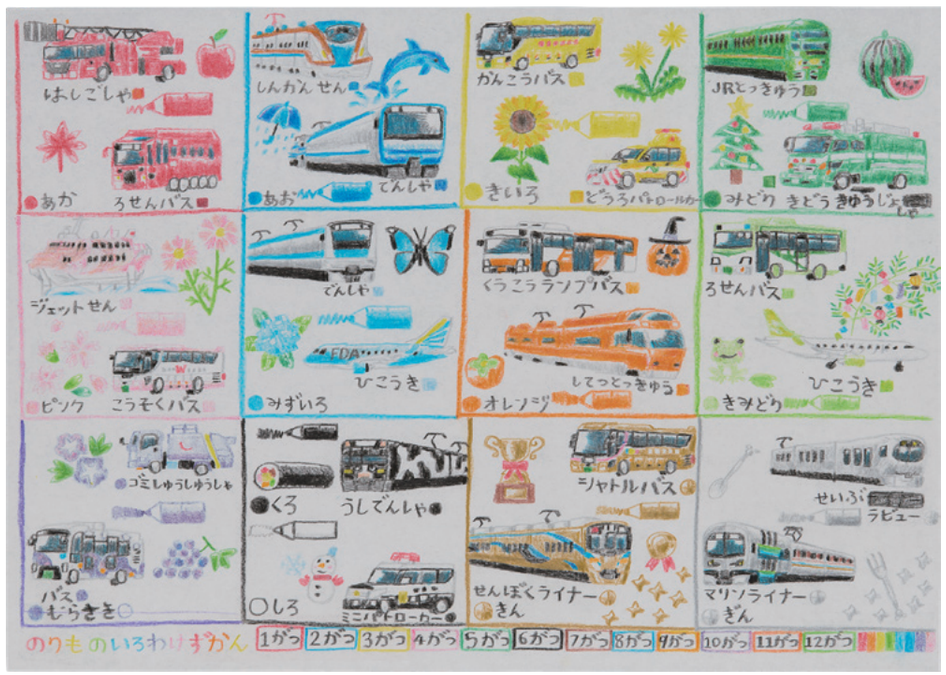


03 上條 翼

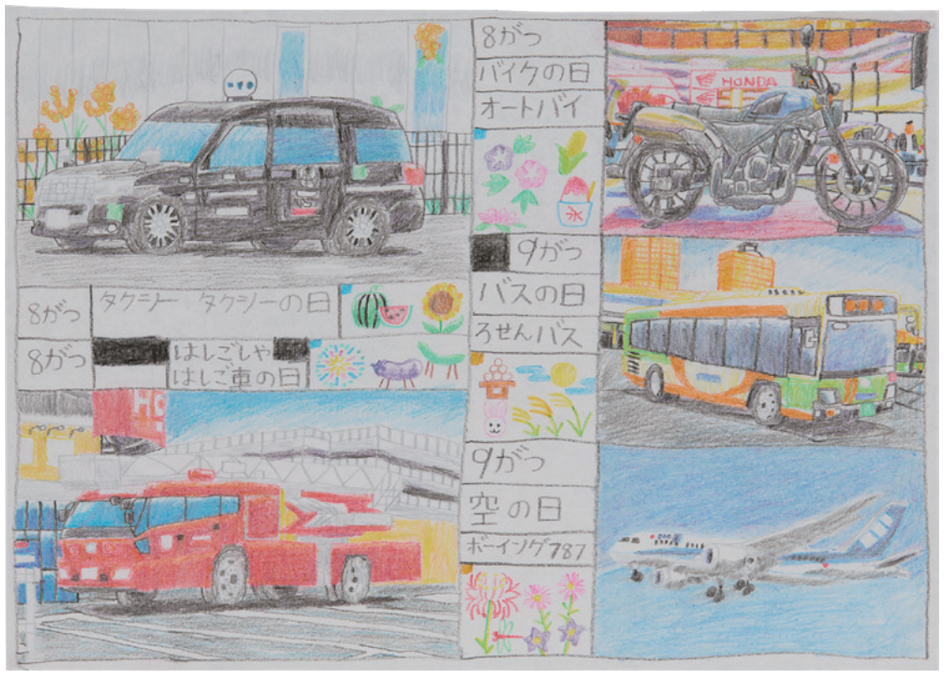
13


19
てっどうのあさやけいろ


あか
あお
きいろ
みどり
オレンジ
しろ・くろ
きん・ぎん
ちゃいろ
むらさき
にじいろ
レインボー
のりものレインボーずかん


はしこしゃ
しんかんせん
がんこうバス
JRとっきゅう
あか
ろせんバス
あお
でんしゃ
きいろ
どうろパトロールカー
みどり
きどうきゅうじょしゃ
ジェットせん
でんしゃ
ぐうこうランプバス
ろせんバス
ピンク
こうそくバス
みずいろ
ひこうき
オレンジ
してつどっきゅう
きみどり
ひこうき
ゴミしゅうしゅうしゃ
くろ
うしでんしゃ
シャトルバス
せいぶラビュー
バス
むらさき
しろ
ミニパトローカー
せんぼくライナー
きん
マリンライナー
ぎん
のりものいろわけずかん
1がつ
2がつ
3がつ
4がつ
5がつ
6がつ
7がつ
8がつ
9がつ
10がつ
11がつ
12がつ





Artist

上條 翼

かみじょう つばさ

1998 年生まれ｜千曲市在住



日中活動は、絵画や塗り絵をして過ごすことが主となっています。画力はかなり高い方で、乗り物の絵を描かせたら右に出る方はいないと勝手に思っています！ 利用者、職員の誕生日には自作の誕生日カードをプレゼントして下さいます。私には、私が乗っている自動車の絵です。本物より格好良く描いてくれます。そんな彼も騒がしい所が苦手で、日々、静かな場所での作業を求めて絵を描いています。（山口 泰史 / 社会福祉法人しののい福祉会）

彼が描く乗り物の世界を初めて目にしたのは、2025年8月の出来事。名前も年も知ることもなく、送られてきた作品集にはたくさんの車や飛行機、列車などが数多く描かれていて、どの作品にも彼の息づかいが感じられた。さらにその作品には、題名や車種名、季節を切り取ったカット画までも描き込まれていた。最初に思ったことは、「彼は絵がとてもうまい」ということだ。旅をする列車の姿を眺めていると、自分まで旅に出たくなる様な不思議な力を感じたのだった。私は仕事柄、車や農業機械などを描く制作の立場にある。それはそれでやりがいがあるが、これが楽しいかと聞かれれば、お客様の要望に応えつつ、印刷物やウェブの世界でいかに要求に応えられるかが重要な要素だといえる。でも、彼の絵を見ていると、それとは違う時間が流れている。消防車やパトカーなど乗り物を楽しみながら描き続けることで、自らを表現者として内にあるまっすぐな感情に触れた気がするのだ。そんな彼の作品の中に、「てつどうのあさやけいろ」と題した一枚の絵に目がとまった。朝日が昇る景色を背景に、機関車が力強く走るその姿は、彼の生きていく感情の清らかさを私に示してくれた。もしもこの先、彼とスケッチの旅のようなことができたなら、僕は純粋に絵筆の思うままに、彼と描くことを楽しみたいと思うのだった。

Curator

トミ ツカダ（塚田 富芳）

グラフィックデザイナー

生まれも育ちも長野県中野市のグラフィックデザイナー。1995 年から毎年アメリカを旅しながら、モーターバイクやルート 66 号線をテーマにしたポスターやアートブックづくりを通して「旅の中の風景」を具現化している。



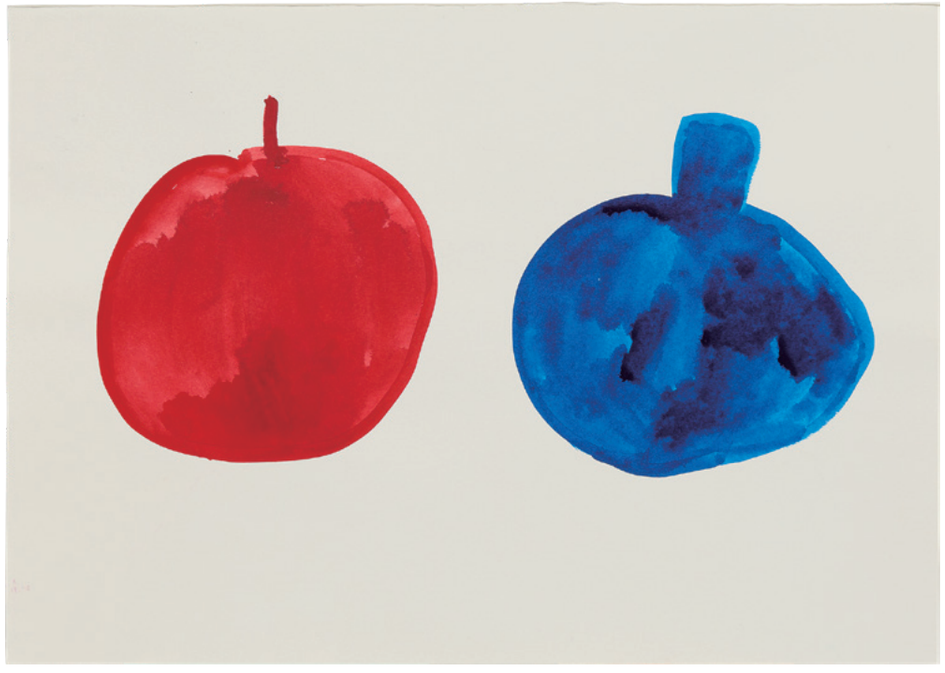
04 河北 泰博

13











Artist

河北 泰博

かわきた やすひろ

1958 年生まれ｜北佐久郡立科町在住



恥ずかしがりやな河北さん、少し照れ屋で顔をそむけてしまうこともありますが、話しかけるとニコニコと笑顔を見せてくれます。色んな人と関われる絵を描く時間をとても楽しみにされているようです。そんな河北さんが描く絵はご本人の日常です。野菜の絵はいつもみんなで野菜を育てているから、車の絵はお出かけが楽しかったから、河北さんの作品には日々の暮らしを大切にする優しさと素直な喜びが感じられます。

（小池 彩乃 / 社会福祉法人しらかばの会たてしなホーム）

美術館では学芸員のキュレーションによって企画が構成されます。一方図書館の重要な業務のひとつにレファレンスがあります。レファレンスで提供するのは答えではなく、求める回答のヒントとなり得る情報を提示することです。利用者の気づきの可能性を広げ、学習や研修をサポートすることを目的とした支援といえます。今回は「この作品をどう鑑賞したらよいか」という質問を想定し、美術的な見方からどのような提示ができるか考えてみました。まずはデザインの分野があります。この明快な色使いの作品からは、明るさとリズムが感じられます。またシンプルな形の連続性という特徴は、北欧デザインにおける図案の繰り返しからなる不規則なパターンに共通性を見ることができます。次に簡略化された対象物は、イラストレーションやシンボルとしても認識できます。これはイメージを膨らませ想像させるという点で、発育を促す幼児向けの絵本などにもあてはまります。加えて限定的な色と図案は、単色だからこその清涼感と落ち着きを持ちます。そこからは工芸分野における陶芸や染色なども想起させられます。このように関連する分野を紐づけて提示するだけでも多岐にわたります。さらに視点を広げれば自然科学や料理など、より多くの見方ができるでしょう。つまり、この作品は鑑賞する側の興味に添って多面的に楽しむことができる、そういった可能性を持っていることが、強みといえるのではないでしょうか。

Curator

細野 夏未

司書

大学教育再生加速プログラム（AP）事業において大学図書館を中心とした学生の学修支援に携わる。その後、中野市立博物館の教育普及担当として、歴史や民俗、自然分野の探求の促進を目的とした体験学習を実施。現在小海町在住。



05 北原 裕之

13











Artist

北原 裕之

きたはら ひろゆき

1969 年生まれ｜駒ヶ根市在住



いつもニコニコな裕之さん。絵を描くことには積極的ではなかった裕之さん。３年前の春、図鑑を観ながら描いてみましょうと支援員が勧めたところ、写真を観ながら黙々と筆を走らせ、これまでにはなかった表現が生まれました。そしてとても嬉しそうでした。それ以降、覚醒したかのように精力的に美術活動に臨んでいます。完成すると満足そうに支援員と「イエーイ！」とハイタッチを交わします。もちろんニコニコで。
（小川 泰生 / 社会福祉法人長野県社会福祉事業団長野県西駒郷）

作品を見たとき、ふと頭に浮かぶ問いのひとつは「これって何を描いているんだろう？」ではないでしょうか。私がこの作品に向き合ったときに思い浮かんだのは、「食材」と「道具」でした。ぱっと見は抽象的でとらえどころのない形。でもじっと眺めていると、だんだん魚や野菜の姿に見えてきます。背びれを持った魚、ほうれん草や白菜のような葉野菜、ブロッコリーやカリフラワー、きのこの仲間、さらには山菜のわらびやこごみまで。「これは何だろう？」と考えるうちに、想像がどんどん広がっていきます。さらに目を凝らすと、包丁やスプーン、缶切りやタワシなど日常使いの道具まで登場。まるで信州の季節の食材を調理する台所の風景が広がっているみたいで、なんだか「ほっこり」した気持ちになります。色づかいも印象的です。緑や桃、茶や紫が重なり合ってやさしい雰囲気をつくり出しているのに、黒い線でしっかり縁取られていて、作品全体に独特の存在感が生まれています。身近な形や色を組み合わせたこの作品は、愛嬌たっぷりで日常にすっと入り込んできそう。家族とおしゃべりしながら食卓を囲む時間や、小腹が空いてつまみ食いする瞬間まで連想させてくれる——そんな温かな空気をまとった作品です。

Curator

圓山 佐登子

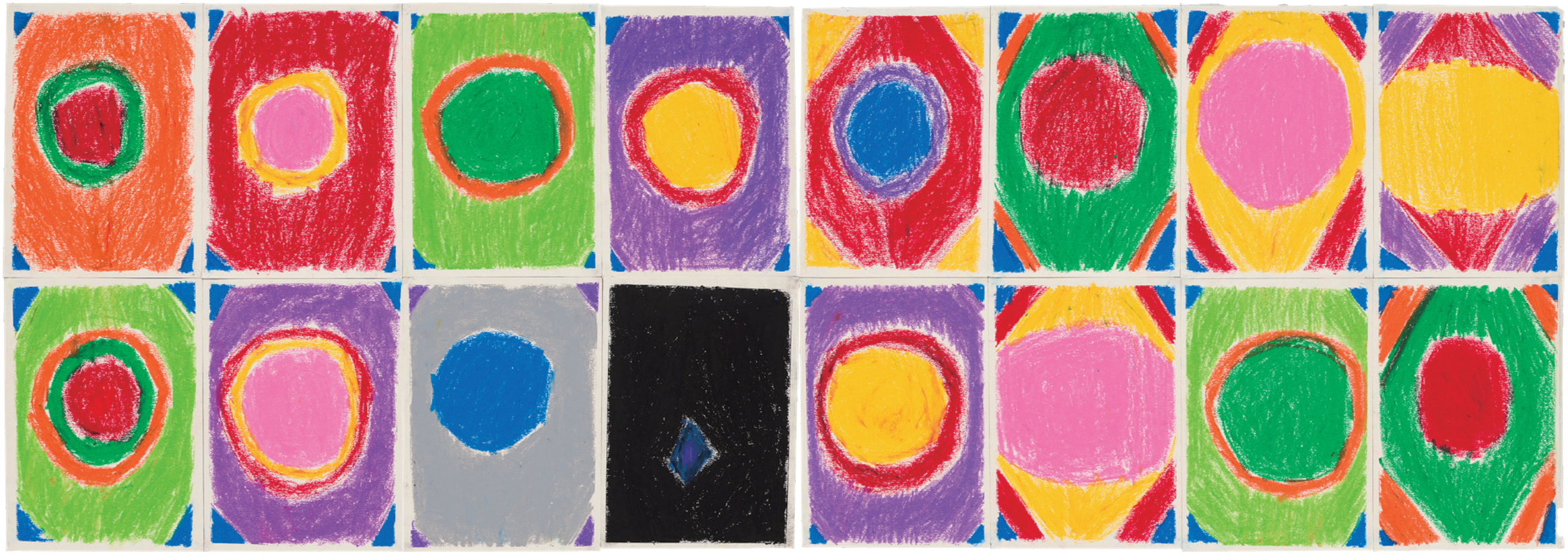
小海町地域おこし協力隊 多文化共生推進担当

埼玉県川越市出身。アフリカ、東南アジアの開発支援の現場を経て、国内の多文化共生や在留外国人支援に携わる。現在は小海町地域おこし協力隊として「地域の多文化共生推進」の活動中。



06 髙地 爽汰

13











Artist

髙地 爽汰

こうち そうた

1996 年生まれ｜北安曇郡松川村在住



爽汰さんは長い指の大きなふわふわの温かい手で、刺繍、陶芸、織物など様々な素材を器用に扱い、いつも穏やかに熱心にたくさんの作品を作っています。日々の整ったリズムの中で、自由創作の時間の絵画は季節の変化や忙しさなどによってか、黒い画面になったり、PCでよく目にする「窓」が現れたりと絵や色使いが変化し、そして再びいつものスタイルに帰ってきます。
（石岡 享子/ NPO法人WHITE CANVAS）

Our relationship to color is so personal, and color is quite powerful. If we pay close attention, we can track our body's response to color. Which colors bring a sense of calm? Which increase our heart rate? The works here based on a circle remind me of breathing. They are also a gateway into seeing how subtle shifts in color change our perception. For example, the same yellow, red, purple and pinks appear in different combinations, changing our response. When the yellow breaks out of the circle form and the surrounding red and purple are more like a diamond I get more of a sense of excitement. When the yellow circle surrounded by red is smaller in the purple I get more of a sense of confinement. A blue dot in a field of black can seem foreboding, but a bigger blue dot in gray feels more like a portal. In the pieces that are blue and green or yellow blue and brown grids, the small addition of yellow lines separating the colors, along with a shift in the size of the grid adds a sense of unexpected tension. The center overlay of a smaller grid serves to bring our eyes to the middle and also teaches us what happens when colors combine or sit next to one another. The mark making is also very important. The artist hand here is quite prevalent. We can feel the way they are moving back and forth to create their shapes. If these shapes had hard and clean edges or were painted super flat our response might be more clinical and removed.

私たちと色との関係は極めて個人的であり、同時に、色には大きな力が備わっています。注意深く観察することで、色に対する身体的な反応をたどることができます。どの色が安らぎをもたらし、どの色が鼓動を高めるのか。ここに並ぶ円を基調とした作品群は、呼吸のリズムを想起させます。またそれらは、わずかな色の変化が私たちの知覚をいかに変容させるかを示す入り口でもあります。たとえば、同じ黄色、赤、紫、ピンクが異なる組み合わせで現れることで、見る者の感覚や印象が変化します。黄色が円形の枠から外れ、周囲の赤や紫が菱形のように見えるとき、そこには高揚感が生まれます。一方で、紫の中に小さな赤に囲まれた黄色の円が現れると、閉塞感や圧迫感が漂います。黒い空間の中にある青い点は不穏な印象を与える一方、灰色の中にある大きな青い点は、むしろ別の世界への入口のように感じられます。青と緑、あるいは黄色・青・茶のグリッドを用いた作品では、色を隔てる細い黄色の線の存在や、グリッドの大きさのわずかな変化によって、思いがけない緊張感が生み出されています。中央に重ねられた小さなグリッドは、視線を中心へと導くと同時に、色が混ざり合う、または隣り合うときに生じる現象を私たちに示しています。さらに、筆致の存在も極めて重要です。ここでは作家の手の動きが明確に感じられます。形をつくるために筆が往復するリズムが、画面に躍動感を与えています。もしこれらの形が硬く、輪郭が整えられ、平坦に塗られていたとすれば、鑑賞者の反応はより冷静で、感情的距離を伴うものになっていたことでしょう。

Curator

Lisa Solomon（リサ・ソロモン）

アーティスト /「生生流転 In Flux」出展作家

カリフォルニア大学バークレー校で芸術実践の学士号、ミルズ・カレッジで美術学修士号取得。アーティスト兼教育者、ワークショップのファシリテーターとして活動。2025 年に小海町高原美術館にてレジデンスと展覧会を開催。カリフォルニア州オークランド在住。



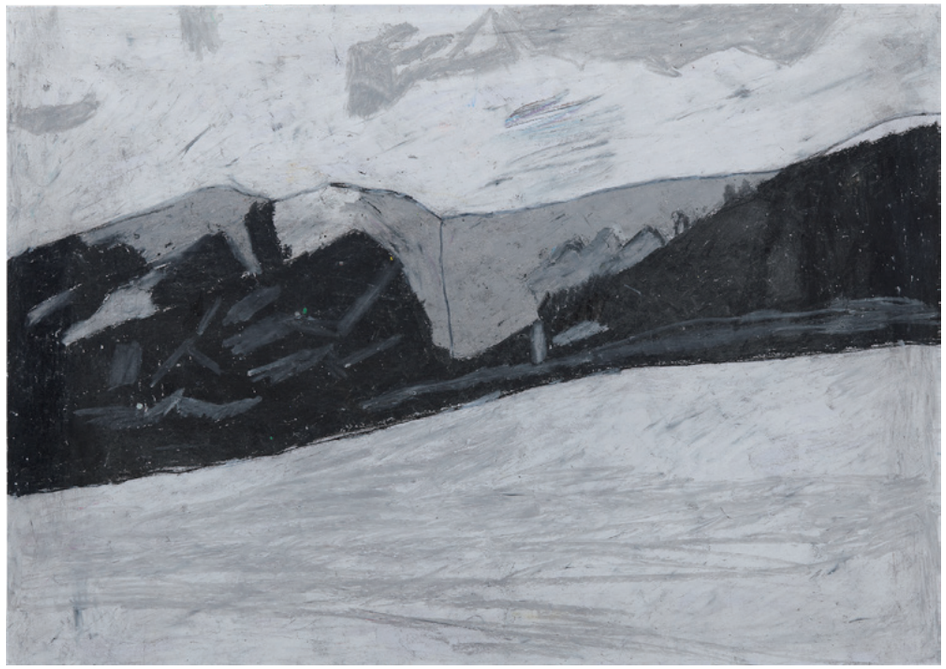
07 佐藤 貞夫

13











Artist

佐藤 貞夫

さとう　さだお

1945 年生まれ｜長野市在住



60歳の定年まで一般企業で働いていた佐藤さんは、その後アートと出会います。真面目で仕事熱心な佐藤さんはアートの場面においても集中力があり、妥協することなく作品と向き合います。クレヨンで色を重ねて濃く‥濃く‥ひたすらに。まるで佐藤さんの生き様、人生、いろいろな想いが詰まっているようです。
（加藤 真理子 / 社会福祉法人廣望会アトリエCoCo）

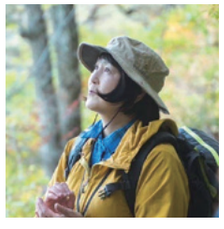
作者や背景が明らかでない自然を題材とした絵画に出会ったとき、そこに共通して流れている「自然を愛する心」を感じ取り、思わず嬉しさが込み上げてきました。クレパス若しくはクレヨンで力強く描かれた作品には、迷いのない筆致と鮮やかな色彩があり、特に黒い背景に青く浮かび上がる山の絵は強い印象を残しました。その世界の中へ自分が入り込んでいくような、不思議な想像を掻き立てられたのです。また、残雪の山と澄み切った青空が広がる風景の絵は、春の訪れを告げるようで、清々しい空気とともに季節の香りまで運んできてくれるように感じました。私は日頃、自然の力をお借りした森でのセラピーを通じて、人々が五感を開放し自然に気づきを得ることで、自分らしさを取り戻し、自分自身や周囲を大切にできるようお手伝いをしています。それゆえに、冬山を描いた作品に触れたときには、スノーシューセラピーの体験が重なり、冷たい空気を思い出すと同時に、なぜか心が温まる感覚を味わいました。今回の絵画と静かに向き合った体験は、私が実践している自然の中でのセラピーと響き合い、自然とつながることの大切さ、そして心地よい暮らしへのヒントを改めて教えてくれたように思います。

Curator

中島 由加

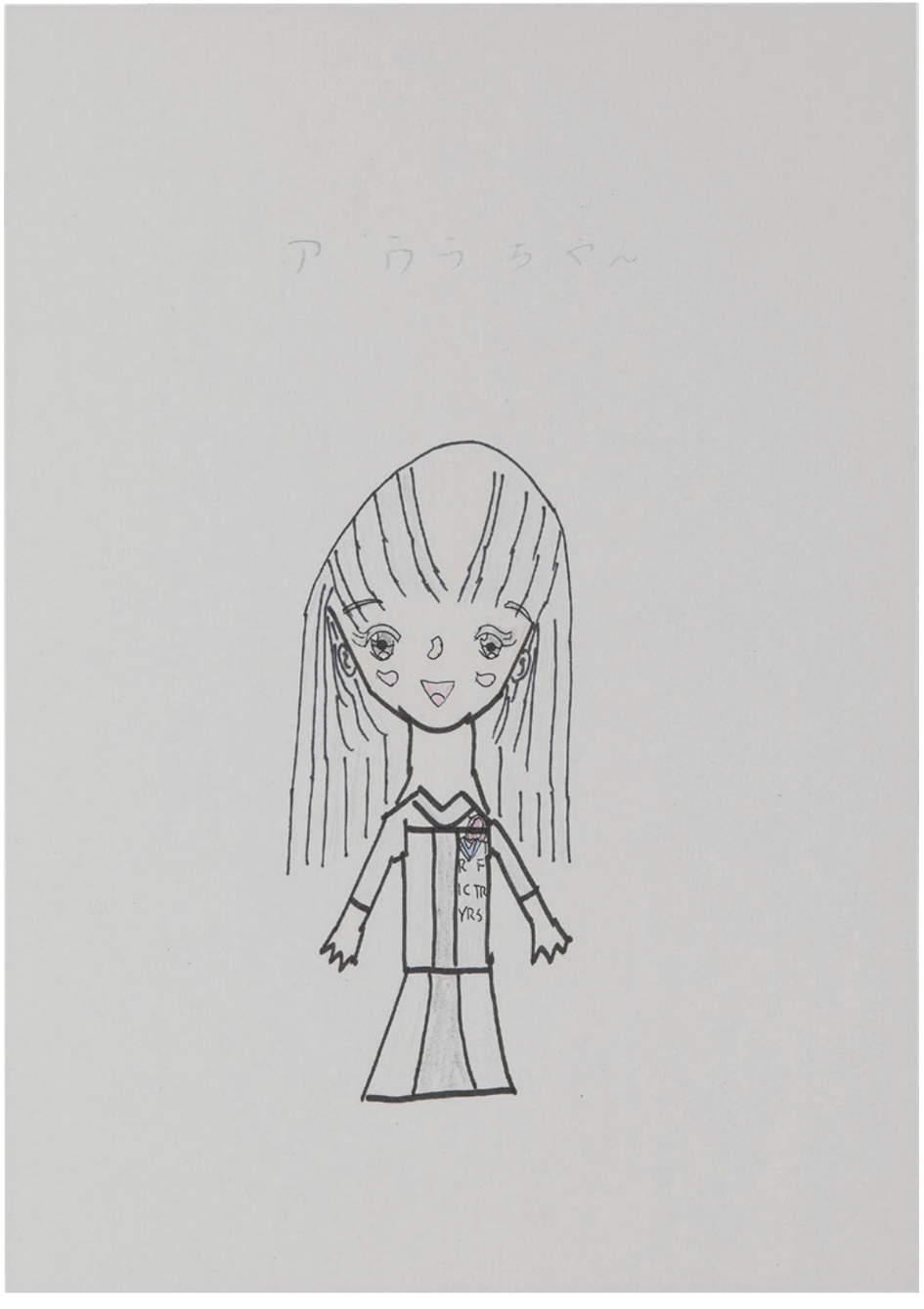
セラピスト

小海町出身。2019 年、憩うまちこうみセラピスト養成事業にてセラピスト資格を取得。現在は松原湖畔などの森や自然を舞台にセラピー活動を行っている。



08 下山 健

13







Artist

下山 健

しもやま つよし

1983 年生まれ｜下伊那郡阿智村在住



机に向かい絵を毎日描いています。描く絵は、女の子です。作者は、名前を「アウラちゃん」と書いています。何年も描き続けています。たくさん描き続けた絵には、一見、同じように見えるのに、背景や容姿に変化が見られます。背景に女の子を守るかのような人物？神？が居たり、髪の毛やまつ毛や鼻が変化したり、スカートの時は足が無かったりと、これからどのような“進化”が見られるのか？　楽しみです。
（荒井 広史 / 社会福祉法人夢のつばさ阿智村多機能型事業所夢のつばさ）

近年、死後の世界の最高に安楽な暮らしを、（鳥が魂の象徴である故、私の魂を現すのにはペンギンがぴったりと思い）ペンギンが永遠の夕暮れの中、平和にたたずんでいる姿に仮託して描いております。皆が同じ死後の世界に行くのではなく、それぞれに専用の死後の世界を持っており、それらが無数に、この世とも重なり合っているというイメージを私は持っております（さらに申しますと、生前の世界と死後の世界では時系列的に生前のほうが先のはずですが、生前の世界と死後の自分の魂が重なり合って存在していると考えるのも一興です）。自分の死後の世界は自分専用なので、自分にとって最高に都合の良い世界であるに違いないと思って救われております。アウラちゃんという少女のキャラクターの描かれた一連の絵には、はっきりとした輪郭線で描かれた少女とは別に、輪郭のあいまいな動物や鬼や仮面や雲のようなものが描かれていて、それらは霊的なもの、死後の世界の魂のようなもの、もしかしたら死後のアウラちゃんの魂で、生きているアウラちゃんと同時に存在しているように描かれているようにも、私には感じられました。

Curator

たかはし びわ

画家

1972 年、東京都出身。1997 年、武蔵野美術大学油絵学科卒業。24 歳のときに長野県佐久市に移住、以降長野県を拠点に制作活動を続ける。一般社団法人二紀会準会員 / 長野二紀会会員 / 日本ペンギン党党員



09 中村 豪

13











Artist

中村 豪

なかむら　たけし

1973 年生まれ｜上田市在住



1日のなかで午後の1時間半が制作の時間です。何を制作するか迷っている時はスタッフと相談します。言葉で伝えてもくれますがシャイなので相手の指をぎゅっと握って「はい」をおしえてくれます。最近はよくお気に入りの色鉛筆で絵を描かれています。他の方が色鉛筆を使いたかった 時、3本色鉛筆を選び描き味を確かめてからコレっという1本を差し出してくれる、優しさ溢れる人柄で多くの人に慕われています。
（佐田 芽衣 / 社会福祉法人かりがね福祉会風の工房）

作品を一目見た瞬間、胸の奥からワクワクする気持ちが湧き上がりました。その感覚の正体を確かめたくなり、私は「この作者はどんな気持ちで描画材を走らせたのだろう」と想像しながら、描く行為そのものを追体験するように作品を見つめてみました。画面いっぱいに描かれた無数の円が、まるで生き物のように弾み、走り回っています。軽やかに踊るような線もあれば、力強く刻まれた線もあり、色彩のリズムが心地よく響いてきます。その描線の勢いから、作者が描くことそのものを心から楽しんでいたのだろうと感じました。作品の細部をたどるうちに、私自身の中にもリズムが生まれ、自然と心が動き出しました。その瞬間、最初に感じたワクワク感の源が見えたように感じました。私が木を主材とした彫刻制作を続けている立場からも、この作品に強く惹かれます。木を削るときの抵抗感と彫り跡の関係のように、画面上の円にも作者の手の動きと呼吸が宿っているように感じるのです。素材に向き合いながら生まれる偶然やリズム。その瞬間的な生命感こそが、この作品を生き生きと輝かせているのではないでしょうか。世界には本当に多様な形や色が存在します。自然の造形も人工の造形も、すべてがどこかでつながっており、それをどう感じ取り、どう形にするかは、作者自身の人生経験や感性に深く根ざしていると思います。この作品の作者がどんな世界を見てきて、どんなことに心を動かされてきたのか。そんな話をぜひ直接お聞きしたいです。

Curator

赤羽 雄太

小海中学校教諭（美術科）/ 彫刻作家

1987 年長野市生まれ。2010 年信州大学教育学部卒業。2012 年福島大学大学院修了、長野県内の中学校で美術教師として勤務開始。主に国展に出品し、二度の受賞を経て 2018 年より準会員。2023 年より小海中学校に勤務。



10 Miss Erie

13











Artist

Miss Erie

1992 年生まれ｜長野市在住

Miss Erie さんは絵が大好きで、ペンや絵の具、色鉛筆、クレヨンなどその日の気分で使い分けて描いています。たくさんの色の中から直感で選び、画用紙に向かい筆を走らせています。絵が完成すると支援者のところに持ってきて「見て！」と指をさして教えてくれます。ひとつひとつ聞いていくと「パパ！ママ！ Erie ！」時々支援者、と家族を描いた絵が多く、大切に想う気持ちがひしひしと伝わってくる温かい作品ばかりです。
（徳永 まなみ / 社会福祉法人稲田会デイセンター YUI）

I think the work is for the young children. They were playing with pens, drawing line. The work is interesting it shows people or children. They look happy, and crowded. The picture shows togetherness, unity and peace, people enjoying being together. There's love amongst them. It a nice and interesting piece of work. —Peggy Thebeyadira

この作品は、幼い子どもたちを対象に制作された、あるいは彼らからインスピレーションを受けて描かれたものと思われます。ペンで自由に線を描きながら、子どもたちの様子がいきいきと表現されています。画面には人々が集まり、幸せそうな表情を浮かべている姿が描かれており、にぎやかで生命力に満ちた雰囲気が漂っています。この作品は「共にあること」「調和」「平和」といったテーマを伝えており、人々が互いの存在を喜び合う様子が感じられます。人物たちの間には愛情とつながりがあり、見る者の心を温かく、そして深く揺さぶる作品です。共有する時間の美しさを思い起こさせてくれる、魅力的で印象的な絵です。
（ペギー・テベヤディラ）

色で遊ぶ。色で遊ぶと様々な発見をする。青、赤、オレンジ、緑、黄色、紫、ピンク。どの色も大好き。ボツワナは色にあふれている。それはここで見る空がどこまでも澄んでいるから。ボツワナの空にはどんな色もぴったりあう。そして、空色はボツワナの国旗の色だ。私たちはこの作品の色の世界に入り込み、自然の中に色の豊かさを見つけるだろう。自然はいろんな色であふれている。この作品の中には、黒色で描かれた部分がある。明るい場所から暗い場所は見えないが、暗い場所から明るい光はよく見える。黒色が、きりりと引き締まった印象を画面全体に与えていて、それはそれで心地よい。これからも、ずっと色と遊びたい。色は私たちに新しい発見をくれるから。（菅井 嘉代）

Curator

Peggy Thebeyadira（ペギー・テベヤディラ）
ボネワマン小学校校長

ボツワナ共和国モレポロレ村出身。大学院修了後、長年にわたりボツワナの初等教育の向上に尽力。教育指導学の修士号を持つ校長として、教職員や保護者から厚い信頼を得ている。熱心なクリスチャンであり、サッカー愛好家でもある。

菅井 嘉代　JICA 海外協力隊

中学校教員として長年にわたり特別支援教育に従事。地元山形県で障がい者のアート展を企画・運営し、表現の場と社会との懸け橋を創出してきた。現在、JICA 協力隊としてボツワナの小学校特別支援学級で活動中。

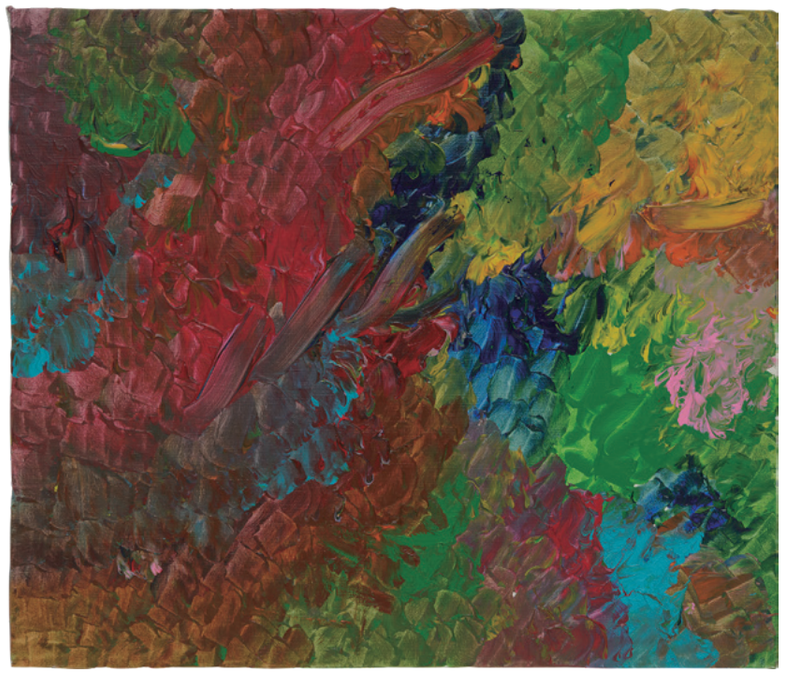


11 守屋 慶彦

13













Artist

守屋 慶彦

もりや よしひこ

1984 年生まれ｜茅野市在住



あふれる好奇心と行動力。時折スタッフを翻弄するほどの俊敏な動きで、好きな活動に取り組んでいます。アート活動も積極的に、没頭すると一日に何枚も仕上げます。チューブの絵の具から好きな色を選んで、最近ではもっぱら化粧用のスポンジを使っています。会話はなかなか難しい守屋さんですが､絵を描いている場面では､「紙ください」「絵の具やります」「赤お願い」と意思をはっきり言葉にすることが出来、頭の中にはっきりとしたイメージがあることがわかります。（鈴木 真知子 / 社会福祉法人この街福祉会この街学園）

幾重にも重ねられた自由な色使いのインパクトは強烈だが、じっと見つめているうちに気持ちが穏やかになるのは不思議な感覚である。深い森の木々の重なりのようであり、陽の光に輝く南国の海面のようであり、また無限に奥深い宇宙のようでもある。いずれの作品も、一時たりとも留まることなく変化し続ける作者の深淵な内なる世界に引き込まれる。誰にとっても、自分らしく生きるために心の表出や表現活動は不可欠である。誰に指示されたり教えられたりすることもなく、人それぞれのやり方で自分の感情を本能のままに自由に表現したものは、それを観る者に生きるエネルギーを与え、そしてその人もまた表現したいという欲求にかきたてられるのである。その作品が観る者に感動を与えるのは、決して上手いからということではなく、自由に表現された作者の人間性と出会うことで心が揺さぶられるからだと思う。つまり観る側の心も自由に解放されているかどうかが試されている。感情も言葉も抑圧され続けると出せなくなってしまう。こどもたちの幸せな育ちと学びを願う一人としては、作者のような自由な表現活動の機会をすべてのこどもに保障したい。

Curator

竹内 延彦

山ノ内町教育長 / 志賀高原ロマン美術館館長

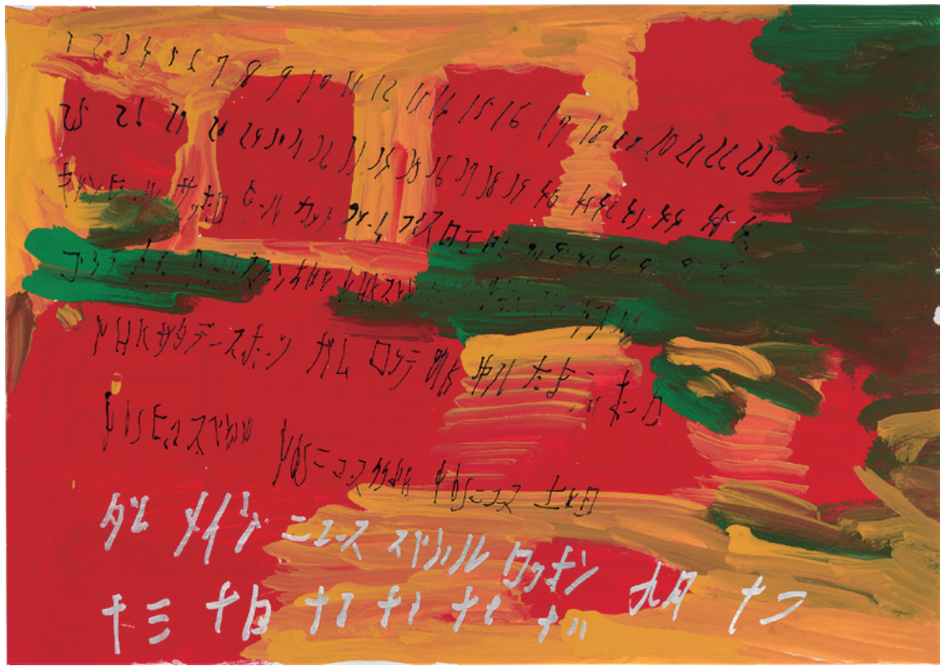
20 代でのフリースクールを原点に、企業、NPO、行政と約 40 年一貫してこども若者支援に携わる。長野県庁で自然保育の制度創設と普及推進、複数自治体で教育長を経験し「こどもがまんなか」の学校と地域づくりに挑戦中。

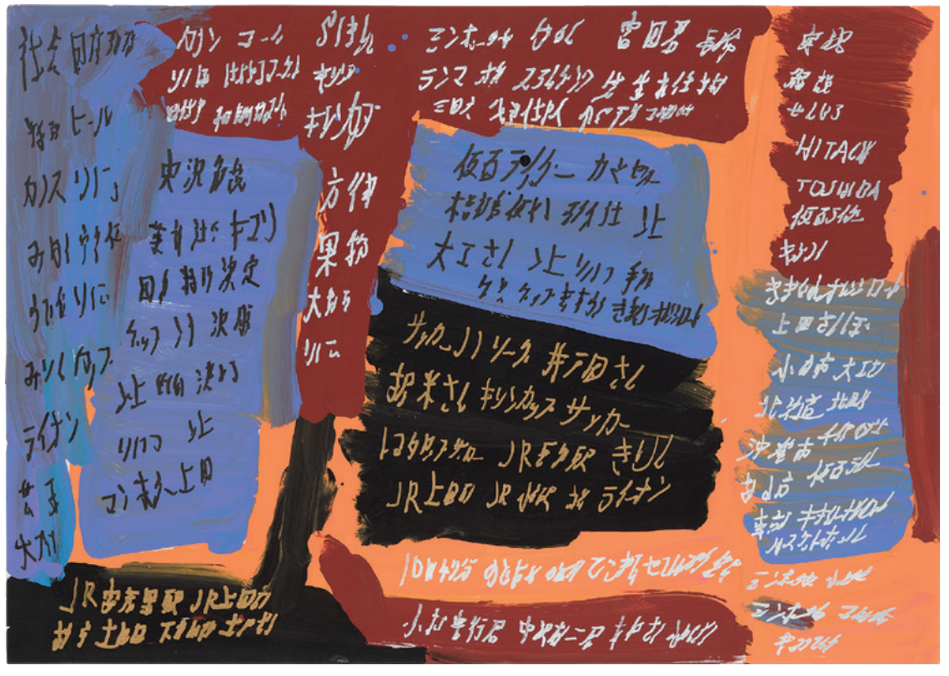


12 柳澤 誠

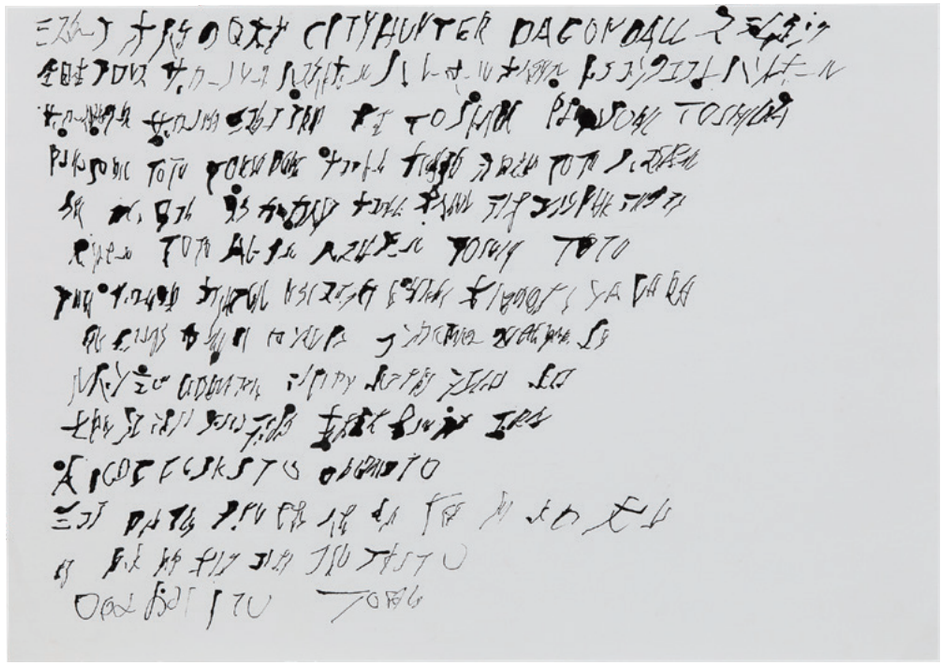
13











Artist

柳澤 誠

やなぎさわ　まこと

1975 年生まれ｜駒ヶ根市在住



「中学の時は漢字博士と呼ばれていたよ。」と語る誠さん。以前は日記も書いていたほどで、字を書く場面が日常の中で多く見られます。一見読めない字もありますが、内容は好きなテレビやラジオのこと、その日の出来事など多岐にわたります。鉛筆や墨で文字のみを書くことが多かったのですが、絵具で彩色した上に言葉を連ねる表現にも取り組むようになりました。そして不定形な色面と文字が組み合わさった独特の作品が誕生しています。
(小川 泰生 / 社会福祉法人長野県社会福祉事業団長野県西駒郷)

残像のような佇まいで作者の中に存在する言葉が詰まっている。無意識の中にある言葉を私も覗かせてもらっているようで、それはまるで他人の家にある本棚を覗いているような気分になった。他人の本棚というのは実に興味深い。なぜなら、その人がこの世の中のどのような事に関心があるのか、なんとなくわかるからだ。仕事や好きな事に関する本、時にはこの世ではどうしようもできない苦労や悲しみを乗り越えるために必要だった本など。だから私はそれを見たときに心が躍る。それと同時に「見ていいのかな、知ってもいいのかな」という感情も抱き、より一層惹かれるものがあるのかもしれない。それはパーソナルな世界に触れる瞬間であると私は思う。この作品を見たときに同じ感情を抱いた。心が躍りながらもこのまま文字を読み進めていいのかとドキドキした。暗闇にある光や夕暮れ時に目を細めると見えてくるような絶妙な色彩の中に、作者の頭の中を占めていた言葉が連なっていて、一時的な感情から浮かんだ言葉なのか、それとも強い関心がある対象なのかと考えてしまう。言葉と色彩、複合的な要素から興味をそそられて、私の創造性まで豊かにしてくれる。もしもこの絵から音が聞こえてくるとしたら…。日常の中でこの絵の美しさを身に纏えたら…。この純粋性の高い芸術で愛する故郷の街並みを彩ることができたら…など、私の妄想はさらに広がっていく。この絵が多様なシチュエーションで奥行きを持って広がる姿を容易に想像できた。

Curator

新井 彩香

山ノ内町地域おこし協力隊
一般財団法人 山ノ内まちづくり観光局

長野県山ノ内町出身。テレビ局や高速道路会社での経験を経て、故郷への愛着から山ノ内町の地域おこし協力隊に着任。山ノ内まちづくり観光局にて、湯田中駅前の活性化や「観光と教育」をテーマに活動中。



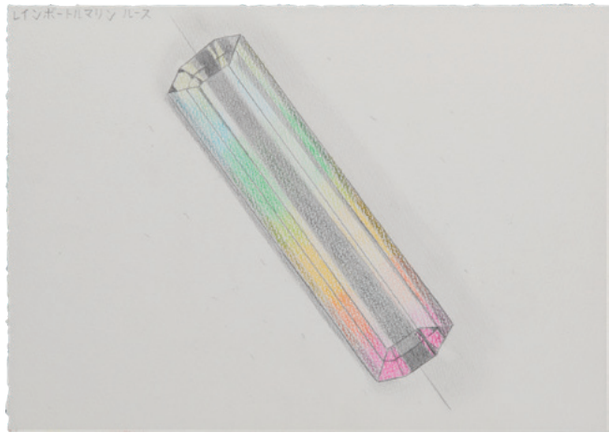
13 Y.K Green

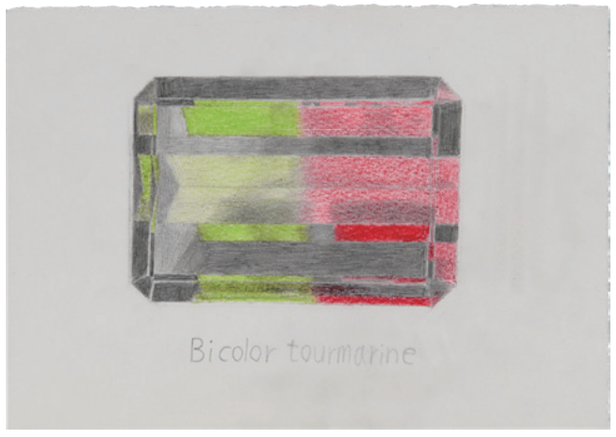
13

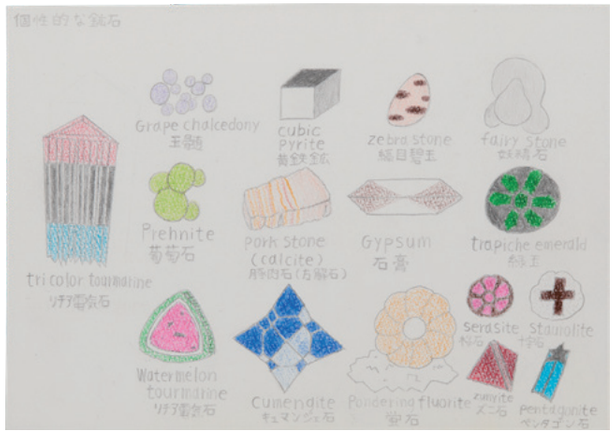














Artist

Y.K Green

上田市在住

イラストの制作は小さい時から。鉱石を好きになったきっかけは、保育園の頃にお父さんがクリスマスプレゼントで標本を買ってくれたこと。一番好きな鉱石はトルマリンで、一つの結晶にたくさんの色が分離しているところがお気に入り。展示作品は、それぞれモデルになった鉱石があって、色はオリジナル。アトリエでは、イラストの他にも、鉱石をモチーフに、石鹸や琥珀糖の制作をされている。(食紅を使って、忠実に色を再現されています！)
(南澤 諒真 / NPO 法人リベルテ スタジオライト)

思えば岩石や鉱物、宝石には、多様な幾何学的形態と色彩があふれている。それらは、かたちにおいては非常にソリッドであり、色においては非常にビビッドだ。そのような明瞭で硬質な形態・色彩が、この作者の心を捉えたのだろう。消しゴム等の消し跡によって表現された反射光が石の幾何学的なかたちや透明感を際立たせ、色が鉱石を通り抜けた光による立体的で透き通ったものであることを思い出させる。また画面を細かい色面に塗り分けているものは、岩石薄片を偏光顕微鏡下で観察した時に見える鉱物の干渉色を思わせる。作者のまなざしは鉱物や宝石から単純化された図形と鮮やかな色彩という要素を抽出し、それが作者なりの鉱石の存在論となって、画面上に鉱石を結晶させているように見える。一方で作者は、動物やキャラクター、風景の絵も同じように描いている。しかしそれらは、鉱物や宝石の絵と同じように、幾何学的形態に変態していたり、カラフルな色彩に染まっていたりする。この操作を、「鉱石化」と呼んでみる。するとこの作者の行っていることは、日常的な事物を「鉱石化」して捉える行為のように見える。そのまなざしは、ときにこの世界をも「鉱石化」して見ているのだろうか。作者にとってそれらを表すことは、ステンドグラスの光に身体を浸すときのような、祝福的な体験なのかもしれない。

Curator

細萱 航平

アーティスト /「シンビズム 6」出展作家

1992 年長野県生まれ。彫刻家。人間の感覚をはるかに超えた時空間スケールで起こる出来事の経験について考える。地質学の知見を参考にしながら、作品制作や展覧会のキュレーション等でプロジェクトを展開する。



Mini Curators

ミニ・キュレーターズ作品セレクション

本展に出品する 13 人の作家たちの他にも、県内にはまだまだたくさんの魅力的な作家たちがいて、様々な表現方法で次々に作品が生まれています。今回のザワメキ調査で出会った多くの作品たちから、美術部 1・2 年生の生徒さんたち 20 名が直感で作品を選び出し、自身が選んだ作品の魅力を文章で語ってくれました。作品選定と、気持ちの執筆、そして美術館に展示されるという一連のキュレーター体験の成果をご紹介します。

また、アフリカ南部に位置する内陸国、ボツワナ共和国で JICA 海外協力隊員として活動する三浦舞子さん、中屋美里さんの協力のもと、現地の小学生の子どもたちにも作品鑑賞をしてもらいました。カラフルな色彩、不思議な造形と向き合い、自分が気になる作品をみつけてもらいました。そして、作品を見て何を感じる？何が描かれているのかな？という問いに、感じるままに自由に答えてもらいました。

61　小海中学校美術部

62　山ノ内中学校美術部

64　レンツウェレタウ小学校の子どもたち

64　マカサネ小学校 6 年生の子どもたち

65　コシコシ小学校の子どもたち

ミニ・キュレーターズ

小海中学校美術部



Artist　higipom（上田市在住）

Curator　小池 叶真

「ジャングルと蛇」

ぼくが、この作品を選んだ理由は 2 つあります。1 つ目は、ぼくがこの作品を見て最初にいいなと思った所は、蛇が木に巻きついているように見えていいなと思いました。2 つ目は、ジャングルみたいにこの絵が見えて植物などがすごくうまく表現されていてすごいと思いました。他にも背景にある虹がきれいな色合いでアーチを描けていてすごくいいなと思いました。



Artist　山内 結香（上田市在住）

Curator　宿岩 美桜

「不思議」

私がこの作品を選んだ理由は、背景の青と赤が混ざった色合いと、絵の具をぶちまけたような描き方がとても独特で素敵だと思ったからです。私はこの作品を見て悲しいようなうれしいような、何となく不思議な気持ちになりました。ザワメキポイントは、絵の具が途中で切れている所です。みんなに見てほしい所は絵の具が途切れている所に数や文字がかいてある所があるので注目してみてください。



Artist　MASASHI ISHIAI（上田市在住）

Curator　小池 琉唯

「複雑」

とてもすてきな色合いでまんなかにいくにつれ色々じゅうたいしているのに、それがすてきに思いました。絵本みたいな感じがしてとても良いと思いました！かなしいようなうれしいような複雑でどんな感情にもとらえられて、とても好きです。



Artist　坂口 哲（上田市在住）

Curator　廣田 共詞

「おだやかな気持ち」

僕がはじめてこの作品を見た時、おだやかな気持ちになりました。このような気持ちになったのは、使われている色が少なく派手でないからかもしれないと思いました。



Artist　平栗 幸子（飯田市在住）

Curator　井出 龍空

「カラフル」

自分がこの作品を選んだ理由はカラフルでかわいらしいと感じたからです。体のうろこのような所が細かくてすごいと思いました。真ん中の一つの目がかわいらしいと感じました。さらに手や足がポーズをうまく表現できているのがすごいと感じました。特に体のうろこのような部分の色が赤、青、茶色とそれに似ている色で描かれている所にこだわりを感じてとてもいいと思いました。このような所に注目してこの作品をみてみてください。



Artist　山内 結香（上田市在住）

Curator　井出 歩和

「色彩の調和」

自分がこの作品を選んだ理由は、細かい色の動きと、空のような鮮やかな青色のバランスがよくて、すてきだなと思ったからです。青色の上に重ねて明るい暖色系の色が多く使われていて、青色のような寒色と色合いがマッチしているのがすごいと思いました。特に色が飛び散っているところと細かい線や太い線、色が集まっているところひとつひとつが印象に残りました。



Artist　浦野 美古都（上伊那郡宮田村在住）

Curator　広瀬 凛太

「味わい深い色」

この作品を選んだのは、たくさんの色を原色のままぬり重ねてあり、飛び散っていたりしているのがなんだかいい味を出していていいと思ったからです。

ミニ・キュレーターズ

山ノ内中学校美術部



Artist　MM（上田市在住）

Curator　山岸 陽

「ココナッツミルクチキンカレー」

僕がこの絵を見て思ったことは題名の通りカレーライスの中にココナッツとチキンが入っていて、しっかりとした色で表現しているのがすばらしいと思いました。他にもミルクが入っているからカレーの色をうすめていたりもして本当においしそうな絵だと思いました。



Artist　坂口 哲（上田市在住）

Curator　児玉 翔琉

「花火」

この絵を見てぼくが良いなと感じたところは、黒い背景にとっても鮮やかな赤やピンクなどが映えているところです。黒は夜の空でとびちっている赤やオレンジなどがきれいな花火に見えたので「花火」というタイトルにしました。この絵にいっぱい打ち上がった花火から迫力のある音が聞こえてきました。



Artist　平出 洋平（茅野市在住）

Curator　滝澤 羽瑠

「笑顔の花束」

この絵は、赤いハートがたくさん描かれていて、とても元気であたたかい気持ちになります。一つ一つのハートが笑顔のようで、見ていると心が明るくなります。青いハートや太陽の絵もあり、工夫が感じられて楽しいです。描いた人のやさしい思いや、周りを幸せにしたい気持ちが伝わってきて、見る人を笑顔にしてくれる素敵な絵だと思いました。



Artist　平出 洋平（茅野市在住）

Curator　小林 優理

「春の楽園」

僕は、この絵が春の楽園だと思います。理由は、チューリップなどの春の花やハートなどの心を温めてくれたり、元気付けたりするものがあるからです。悩んでいたり、困っていたりしたときにこの絵を見たら、すごく力をもらえると思います。真ん中に妖精も居るので願いを叶えてくれると思います。この絵はすごく心を癒してくれるので良いと思いました。

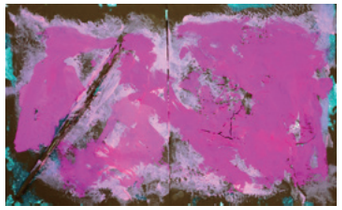


Artist　川橋 誠（北佐久郡立科町在住）

Curator　うりょ

「色々な色」

この作品を見て私は、周りが明るいかんじで中は少し暗めの色になっていてどの絵にもない良さを感じました。だいたんにぬっていることによってインパクトのある作品になっていることと、少ない色に見えてたくさんの色が入っているのがおもしろいと思いました。



Artist　川橋 誠（北佐久郡立科町在住）

Curator　小野 詩織

「概念が変わった作品」

この作品で良いと思ったところは、作品に 2 枚の紙を使っているところです。作品を 1 枚だけでなく、2 枚で表現することで、大きくなり、良いと思いました。そして、描くのに使った筆が作品の一部になっているところにおどろきました。まさに、表現の仕方の概念が変わった作品だなと思いました。



Artist　川橋 誠（北佐久郡立科町在住）

Curator　矢野 龍一

「現代アート」

この絵を見てみて、ふつうの絵とちがって、例えば青の絵の具が一部とても厚くなっていたり、太陽や、生物などの物体がかかれていなかったりしていると思いました。黄色と青以外にもさまざまな色をつかっていていいかんじのグラデーションになっていると思いました。





Artist　平塚 晴貴（茅野市在住）

Curator　関谷 恭花

「花が咲く」

私は、この絵を見てとても色の混ざり方や配色がきれいだと思いました。絵の具の色が赤や青で統一されていて、所々がピンクや混ざってむらさき色になっているのもとてもきれいですごいと思いました。また、線の太さが不均一でとても細かいところや、にじんで太くなっているところがあるのも予想ができなくて良いと思いました。

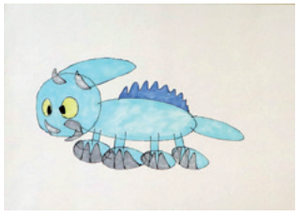


Artist　小松 三剛（駒ヶ根市在住）

Curator　堀米 彩羽

「新しい発見」

この作品は、上の方から絵の具がたれているのがはくりょくもあるし、きれいだと思いました。色がまざりながら下へいっている所がすごいと思い、上の色との変化がおもしろいと思います。ごうかいに見えて細かい所もあります。この絵を見て、考えながら作品を鑑賞することが楽しいと思いました。



Artist　芝田 柚葉（飯田市在住）

Curator　Sattin

「水色の生き物」

最初にこの絵を見たとき、とてもかわいいなと思いました。特に、頭につのがあるところやしっぽが太いところ、目がより目のところがかわいいと思いました。体の色が水色、背中のボコボコの色が青色、目の色が黄色など、全体的に色のチョイスがいいなと思いました。全体的に丸いのも、キャラクターという感じがして好きです。

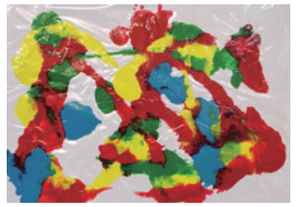


Artist　百瀬 裕昭（駒ヶ根市在住）

Curator　あおい

「トンネル」

たくさんの色を使っているわけでもないのに、あざやかな色合いに見えるのがいいなと思いました。右はしのところに奥ゆきがあってトンネルのように見えます。筆のかすれ具合や絵の具が飛び散っているところもいいなと思います。色が重なっていたり、下の絵の具の色が見えていたり、いろんな工夫があったりして面白いです。



Artist　両角 直也（茅野市在住）

Curator　S

「にじ」

いろいろな色を使っていてとてもいいなと思いました。色と色が混ざり合っているところがとてもきれいだと思いました。何色も使ってかいているので、にじに見えました。また、筆をだいたんに使って描いているのでおもしろいと思いました。とてもいい作品だなと思いました。

Artist　雪（上田市在住）

Curator　まりお

「どこから見るか」

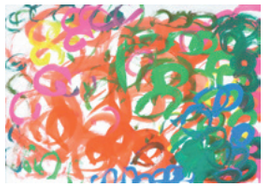
私は、この作品を見て思ったことが、2 つあります。1 つ目は、上から見ると、マンボウに見えてくると思いました。少しふくらみがある赤い所が目に見えてすごく不思議で素敵です。2 つ目は横から見た時に、裏返っている船に見えてやっぱり不思議だな、と思いました。この作品は見る度不思議な気持ちにさせてくれる作品だと、私は思いました。

Lentsweletau Primary School students / Lentsweletau

レンツウェレタウ小学校の子どもたち（レンツウェレタウ村）



Koketso | Sesha
Angelita | Eishier

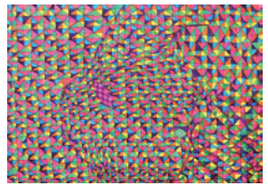


Artist　S.A（上田市在住）

Curator　Koketso / コーケツォ

「My favorite color」

I chose this work because it uses my favourite colours. My favourite colours are red and orange.
自分の好きな色が使われているからこの絵を選んだ。私の好きな色は、赤とオレンジ。



Artist　渡邊 重雄（上田市在住）

Curator　Koketso / コーケツォ

I think it's a wonderful picture. I think it depicts flowers.
ステキな絵だなと感じる。花が描かれていると思う。



Artist　平栗 幸子（飯田市在住）

Curator　Sesha / セーシャ

「Many colors」

It was fun to look at because it used lots of different colours.
色んな色があってカラフルで見ていて楽しかったから。



Artist　宮澤 薫（駒ヶ根市在住）

Curator　Angelita / アンジェリータ

「Colorful」

I chose this one because I thought it was colourful and beautiful.
いろんな色や形があってきれいだと思った。カラフルできれいだと思ったからこれを選んだ。



Artist　TA-4（上田市在住）

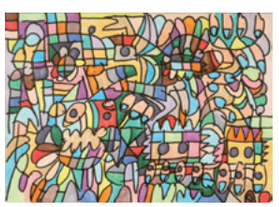
Curator　Eishier / エイシャ

「Various colors and shapes」

I thought it was beautiful with all the different colours and shapes. I liked it because it used pink, which is my favourite colour.
いろんな色や形があってきれいだと思った。私が好きなピンク色も使われていて好きだった。

Makgasane primary school students / Lentsweletau

マカサネ小学校 6 年生の子どもたち（レンツウェレタウ村）





Artist　平栗 幸子（飯田市在住）

Curator　マカサネ小学校 6 年生の子どもたち

「Colorful and beautiful. / いろんなものが見えてくる」

Looking closely, you can see birds and flowers painted.
It was also fun to spot hands (that look like fingers) and creaturespainted on it.
カラフルできれいだと思ったから。よく見てみると鳥や花が描いてある。手 (指のように見える) や生き物が描いてあるのを見つけられるのも面白かった。



Artist　雪（上田市在住）

Curator　三浦 舞子　JICA 海外協力隊

「エイリアン？」

なんだか一つだけテイストが違って目に止まりました。可愛い色合いですし、角をつけているのも不思議。子供達に見せた時も、何コレ？と話題になっており、印象に残りました。

Kgosi kgosi primary school students / Tlokweng

コシコシ小学校の子どもたち（トロッケン村）

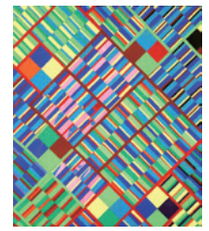
Jennifer / ジェニファー
Mighell / ミゲル
Loaro / ロアロ
Chole / コーレ
Lame / ラメ
Oagile / オアヒレ
Shosho / ショショ
Janet / ジャネット
Lelentle / レレンツェ
Boyboy / ボイボイ
Peo / ペオ
Junior / ジュニア
Lisa / リサ
Jeyden / ジェイデン





Artist　川橋 誠（北佐久郡立科町在住）

I feel happy because it is different colors. (Oagile and Lelentle)
様々な色があって、幸せな気分になれる。



Artist　TA-4（上田市在住）

Because it uses Botswana coloursblue, black, and whiteand is colourful. (All students)
ボツワナカラーの青・黒・白が使われていてカラフルだから



Artist　芝田 柚葉（飯田市在住）

Dragons, rhinoceroses, birds, caterpillars, and dinosaurs are gathered together. (Oagile and Lelentle)
ドラゴン、サイ、鳥、毛虫、恐竜が集まっているようにみえる。



Artist　S.A（上田市在住）

Because it has many colourful, beautiful circular patterns drawn on it. (All students)
カラフルで綺麗な丸の模様がたくさん描かれていて美しいから。



Artist　平出 洋平（茅野市在住）

I like it because there are flowers. I also like that animals like dogs and cats are drawn on it. (All students)
花があるから。犬や猫のような動物が描かれているから。



Artist　武井 洸貴（茅野市在住）

A lion is talking to a zebra.
-Hello! What' s your name? Where do you come from? (Oagile and Lelentle)
ライオンがシマウマとお話ししている。「こんにちは！君の名前は何？どこから来たの？」





Artist　伊佐岡 英里子
（北佐久郡立科町在住）

They(Japanese) are speaking Japanese language. (Oagile and Lelentle)
日本人同士が日本語でおしゃべりしている様子にみえる。

It looks like either a sea turtle or a moth. (Oagile and Lelentle)
ウミガメ、もしくは蛾にもみえる。



Artist　higipom（上田市在住）

There are parts that look like people's faces, which is interesting. The paint is three-dimensional and unique. (All students)
人の顔のように見える部分があって面白い。絵の具が立体的だから。



Artist　大川 智子（駒ヶ根市在住）

Curator　中屋 美里　JICA 海外協力隊

猫のような動物が習字の筆で描かれていると思いました。絵の具や色鉛筆などがあった中で習字の筆で描こうとしたのか、そこには習字の筆しかなかったからそうしたのか、普段は文字を書くことに使われる習字の筆で描かれているところが気になりました。

広げる、広がるキュレーション

ザワメキアート展2025 において、“キュレーションをキュレイトする”というテーマで全体の構成を組み立てました。要約すると“人と人を結ぶ”という試みであり、この“人”というのが、今回の13 人の作家たちのことであり、その作家たちと親和性を持ち、作品について語る13 人のキュレーターのことでもあります。そしてそのキュレーターたちの言葉が、人と美術の繋がり、鑑賞による想いを形とする特別なキュレーション体験として、本展に訪れてくれる多くの方々の感性を動かし、アートの環がさらに広がるきっかけになればと願いました。

髙地爽汰さんの鮮やかな色と形による構成、繰り返しの制作により今後も広がり続けるであろうカラーフィールド的な展開について、同じく色彩による表現や視覚効果を追求するカルフォルニア在住のアーティストであるリサ・ソロモンさんの目線からの評価を期待しました。次に、Y.K Green さんの興味の対象は鉱物の輝きや宝石の構造にあるようで、それを描いて表すというこだわりを紹介するための工夫が必要でした。そこで共通する興味と、地質学の知識を表現に取り込み、彫刻、メディア・アートとしての展開を行う細萱航平さんに頼むのが相応しいと考えました。また、全ての人類をペンギンに置き換え、戯画的に日常を風刺する画家、たかはしびわさんにはそのキャラクター性を重視した観点から、下山健さんが日常的に描き連ねる“アウラちゃん”という謎めく少女像、その惹き付けられる精神性の正体に迫ってもらいました。そして、卓越した描写力で乗り物を描き、カラーリング指定を意識した配色と画面構成を行う上條翼さんには、同じく車やバイクを愛し、ポスターアートやノスタルジックなロードビジュアルを手掛けるグラフィックデザイナーのトミツカダ（塚田富芳）さんにその可能性を感じてもらいたいと考えました。一方、純粋な絵画表現としてではなく、言葉としてのメッセージ性と、ビビッドな色の紙を選択し、そこに文字を書くというビジュアル面の両方で自身の感情を物語るのがAiKA さんでした。文章表現としての個性や芸術性について、学芸員以上に近しく捉えてもらえることを期待し、詩人の石田諒さんにお願いし、その独特な世界観を読み解いてもらいました。

5 名のキュレーターはいずれも自身が制作側に立つ表現者として、作品と関わりました。色彩、像、興味、表現という部分で強い共通性がある、同種の表現者同士が交わることで感じられる、真意と造形に触れてもらうことができたのではないでしょうか。

守屋慶彦さんの絵画をみて、この湧き出すかのように広がるオールオーバーな抽象性と、重なり続ける多色使いは、作家の深層心理を覗き見るような感覚、内に秘められた精神性の発散を感じさせます。県内各地で教育長を務められてきた竹内延彦さんには、教育研究、児童支援の面から「自分らしく生きるための心の表出」として行われる創造の自由さと観る側の心の在り方について述べていただきました。同じく、現役の教師という立場から他者の作品と純粋に向き合うという姿勢を示してくれた赤羽雄太さんは、観る者を圧倒する描き込みの密度がある中村豪さんの造形を、リズムと瞬間的な生命観であると捉えてくれました。それは木彫作家でもある赤羽さん自身の経験や動作から造形に触れてくれた部分でもあります。また、美術館学芸員とは異なり、司書としての支援の仕組みである“レファレンス”の方法を例に解説を述べてくれた細野夏未さんは、河北泰博さんが描く素朴でありながらもシンボリックな絵にはデザインやイラスト、工芸など、様々な可能性が秘められていることを示し、鑑賞のためのヒントと、情報としての探求方法を教えてくれています。佐藤貞夫さんの力強く塗り固められた画面には雄大な山岳の存在感や、雪景色の静寂など、清涼な空気感が纏います。自然から与えてもらえる穏やかな癒しの感覚と、美術作品から得られる感動を結びつけるという解説は、松原湖周辺の森でセラピー活動を実践し続ける中島由加さんだからこそ伝えられる言葉です。

4 名のキュレーターは自らが制作する側ではなく、教育、支援、療法といった他者をサポートをする立場として、各々の経験と方法を基に、自身の活動内容に添った形で作品と向き合い、独自の言葉を述べてくれました。

また、それぞれの地域において、今回の試みを通じて美術をこれからの活動の一環として捉えていただけるものと信じ、本企画への参画をお願いした方々がいます。作品と出会うこと、それが“人”の生みだす表現の塊であることを知り、各自の見方、感覚を重視してその面白さを伝えてもらいました。それは美術館学芸員や、作家、各専門家ではなくとも、捉えられる純粋な感覚であり、美術作品により与えられ感動は誰にでももたらされるものであり、それを語るのは誰にでも可能であるということを知ってもらいたいと考えます。

山ノ内町で地域おこし協力隊として活動する新井彩香さんには、観光と教育の両側面から地域活性を促進して行く中で、新井さん自身に選んでいただいた作品と向き合ってもらいました。文字と色彩による多層的な平面構造を持つ一見難解な柳澤誠さんの作品と、感覚的な触れ合いを通じてその奥行きと個の内に秘められた創造性に気がついたようです。このようなアート体験を、今後も伝えていってもらいたいと期待します。北原裕之さんの描く黒く太い輪郭線と対照的な淡い色彩で塗られた、分かりそうで分からない不思議な“もの”の絵の魅力に惹かれ、「これは何だろう？」という率直な疑問と見え方の可能性を文章化させてくれたのが圓山佐登子さんです。小海町で地域おこし協力隊として多文化共生を推進する活動を行う圓山佐登子さんは、今回のボツワナの子どもたちや現地で活動する教育者や協力隊の方々と本企画を繋ぎ、美術表現の価値や鑑賞に国境はないということを示してくれます。ボツワナの初等教育の向上に尽くすペギー・テベヤディラさんと、自身も障がい者のアート展を企画した実績を持つ菅井嘉代さんは、Miss Erie さんの描く鮮やかで賑やかさ溢れる画面から純粋な“喜び”という感情を読み取ってくれました。それはMiss Erie さんの作品をみる多くの人が共通に受け取ることのできる印象でもあり、また作家本人が制作に向ける意識として基本となっている部分なのかもしれません。最後に、北信の会場として今回急遽参加を決めていただき、キュレーターとしても協力していただくこととなった阿部澄夫さんが作品に寄せてくれた感想がとても印象的でした。上谷恋さんの作品は筆ではなく、ビー玉や木の実というを転がすという動作のみで作られ、操作性と偶然性が重なり合うことで生まれる描線の模様が美しい絵画を描きます。阿部さんは上谷さんが作った一枚の作品、その色彩から自身が普段働く一本木公園の季節や環境によるバラや自然の景色、その変化を思い浮かべられました。色や形というものが与えてくる影響により、作品をみる人それぞれが異なる印象を受ける、それが美術作品の持つ力だといえます。作家の数、鑑賞者の数、そして今回はキュレーターの人数分だけ、作品について語る言葉がでてくるというのが当然であり、何よりもそれが自由であって良いということをあらためて教えてくれたようでもありました。

美術展示において主役となり得るのは勿論選び出された作品であり、その作品を生み出した作家たちです。ザワメキアート展2025 においても13 人の素晴らしい作家に出会うことができました。ひとつひとつの表現が個性として、他者の感覚を刺激する。この誰の心でもきっと感じ取ることのできるであろう“ザワメキ”を、今回は13 人のキュレーターたちに代表して感じていただきました。作家や作品にも個性があるように、見る側の感じ方、捉え方にもまた個性があるのです。私たちが今後、美術作品と向き合って行くうえで、何が正しくて、何が間違っているということは決してありません。素敵だなと感じる作品を選んでみる、そしてその作品について何か少し考えてみる。それは個人個人が自由に行うことのできるキュレーションの出発点になるものでもあり、同時にキュレーター、鑑賞者も主役となり得るものではないでしょうか。

小海町高原美術館　学芸員　鈴木 一史

ザワメキアート展 2025

Curate the curation | 表現とキュレーションを再構築する

作品展

小海町高原美術館
2025.11/29 土 — 12/22 月
イベント
オープニング 11/29 土
ワークショップ「ビー玉・木の実でコロコロアート」11/29 土

中野市一本木公園展示館
中野小学校旧校舎・信州中野銅石版画ミュージアム
2026.1/17 土 — 2/8 日
イベント
オープニング 1/17 土
ワークショップ「ビー玉・木の実でコロコロアート」 1/17 土

主催

長野県
ザワメキサポートセンター
小海町高原美術館
一般社団法人一本木公園バラの会

共催

長野県教育委員会
信州アーツカウンシル（一般財団法人長野県文化振興事業団）

企画・運営

中嶋 実（小海町高原美術館　学芸員）
鈴木 一史（小海町高原美術館　学芸員）

運営（社会福祉法人長野県社会福祉事業団）

ザワメキサポートセンター（長野県障がい者芸術文化活動支援センター）
中村 勘二（本部事務局　企画課長）
吉澤 千恵子（本部事務局　企画課主事）
持田 めぐみ（本部事務局　企画課主事）
ザワメキサポートセンターサテライト
小川 泰生（長野県西駒郷　駒ケ根日中支援課主任支援員）
小松 勇樹（長野県障がい者福祉センター　総務課主事）

作品出展協力

社会福祉法人かりがね福祉会
社会福祉法人廣望会
社会福祉法人この街福祉会この街学園
社会福祉法人しののい福祉会
社会福祉法人しらかばの会たてしなホーム
社会福祉法人稲田会デイセンター YUI
社会福祉法人長野県社会福祉事業団長野県西駒郷
NPO 法人 WHITE CANVAS
社会福祉法人夢のつばさ阿智村多機能型事業所夢のつばさ
NPO 法人リベルテ

取材協力

中屋 美里（JICA 海外協力隊）
三浦 舞子（JICA 海外協力隊）

図録

発行日

2025 年 11 月 28 日

編集執筆

中嶋 実・鈴木 一史

編集

ザワメキサポートセンター

執筆

13curators
赤羽 雄太
阿部 澄夫
新井 彩香
石田 諒
たかはし びわ
竹内 延彦
トミ ツカダ（塚田 富芳）
中島 由加
ペギー・テベヤディラ & 菅井 嘉代
細萱 航平
細野 夏未
圓山 佐登子
リサ・ソロモン

アーティスト紹介

荒井 広史（社会福祉法人夢のつばさ阿智村多機能型事業所夢のつばさ）
石岡 享子（NPO 法人 WHITE CANVAS）
小川 泰生（社会福祉法人長野県社会福祉事業団長野県西駒郷）
加藤 真理子（社会福祉法人廣望会アトリエ CoCo）
小池 彩乃（社会福祉法人しらかばの会たてしなホーム）
佐田 芽衣（社会福祉法人かりがね福祉会風の工房）
鈴木 真知子（社会福祉法人この街福祉会この街学園）
徳永 まなみ（社会福祉法人稲田会デイセンター YUI）
南澤 諒真（NPO 法人リベルテスタジオライト）
武捨 和貴（NPO 法人リベルテ）
山口 泰史（社会福祉法人しののい福祉会）

デザイン

柳沢 明夫 (onigiri)

撮影

大木 文彦
鈴木 一史

発行

ザワメキサポートセンター
〒381-0034 長野県長野市大字高田 364 番地 1
社会福祉法人長野県社会福祉事業団 本部事務局内
TEL：026-217-0022

© 2025 ZAWAMEKI SUPPORT CENTER

